源氏目案

下

わらわ

恵まて

[V.3]

PL788
.4
.G43 G326
1654
vol.3
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551303

4

源氏目案巻第六　　目上

あ

一あつしくなむなど云心也　靈運（レイウン／アツシク）　當遅（タウセン）　日本紀

一あへぞ　不遑（フソク／あへず）なりや　一あつれなりや　あつれなりや　人

一おもしろきすをも云おもしろきをも云心也　おもしろかるべきこそや

一あいなく　無愛（ムアイ／アイナク）　一あぢきなう　無為（ブイ／アヂキナシ）　無情（ハゼウ／アヂキナシ）

一あながち　強（キヤウ／アナガチ）　一あへなく　無敢（ブカン／アヘナク）

一あやし　怪（クハイ／アヤシキ）　一あしき風　かぜさしとハ更衣（カウイ）

のあすか萩（コハギ）ハ源氏のあさがほ心なきハあさがほなる心なりとぞ

一あさまつりごと　春宵苦短日高起（シユンセウクルシンデミジカシヒタカクシテオク）　從此君王不早朝（コレヨリクンワウアサマツリゴトセズ）

長恨哥　一あさぎれゐ　禁中（キンチウ）　朝餉（アサガレヰ）の間

とて二万あらば百まで御膳を調るや。早朝まいるや。常の供

御はかはらず神供や。箸をいたゞきとりてあまりくなる

つるや。わきて箸をおきて立かといへば。胡はなさきおきといへば

一 あらぬ仇敵（キウテキ・アダカタキ）

こまうぞの礼をえらるや

こころころや

一 あさきこころ あふさ海くらさ海や。縦横（ジユウワウ・たてよこ）まよへれぶや

一 あぶめく あぶくさ海や

一 あらめて 影（カゲ）

一 あま 音ハきれあまさて。背（セ）ハ髪（カミ）をすらず。大かくひゆいぎちあまく

ぞきてあまいあるや。さげあまきあら背すりまて ハおりし

一 あまりえびすあさき 源氏

一 あさましきれど あさましす

一 あかね 不足（フソク） ふしぬや

一 あやうき 陰謐

一 あさいます あもくさきや

一あくがるゝ　あちこちさまよひあるこゝろ也

一あくれ　あこがる也　一あぶるゝ　分散(ぶんさん)するゝ心也

一あつかはしきもれあまどふや

一あへなし　あやなきなしや・あへ物と云ハあやなき物也

一あざれ　されたる心也　一あくまて　不足(フソク)ともなき也

一あへしらう　八雲　うけらしくひきけはなるゝ心也

一あさ〳〵し　俗(ぞく)にあくべきといふに同し・あくるをも云也

一あざめ　阻(ソリ)せざめぐる心　一あいぎやう　愛敬(アイキヤウ)

一あやめもしらぬ　綾目(アヤメ)　物の色あひのしられぬを云也

一あかり成　りしましきこれ心なり

一あさし　饗食(キヤウ)也　かりまいとといふ也

一あてもなくあてやかなうつくしき心也

一あそん朝臣也紀守とあげて源のうえの字也

一あてひと貴人也　　一あこ吾子我子小児を云也

をとこ事よりてあこきと云也　一あさうつけしあわくもろきき人の心おろかなるを云也流ろしハよきひとれてうする詞也よくもなし

つけしなとゝ云かたくなしき哉多端

一おやすくおいあくや　　一あさましくあきれ心ろたるさまや

一あざり阿闍梨・安恵内供奉・慈覚大師ノ弟子・天台座主等ノ

五娟補阿闍梨ニ　　一あかして　もちかゝる心也孟津則駁也

一あさ朝の源氏のいそぎ出の所ハ此息事まれ心さまへぬと

主人のすまつけらちやや　　一あかい衆肉也

一あかゝきさてくゝ抱りしまゝて人をつゝむ所さ海や

一あしられ露まゝゝあゝしぬ 朝露貪名利夕陽憂子孫

白氏文集

一あつゝり諸院を別当あづゝ

又まて

一あいぶれきらあいつしこゝや

又あまししろ心や

一あしたそらに見をあゆれ

さおあし

一あられあしらちもさげさる

とハ如雨脚と詠まる元

一あさむられ軟ざまされ曳

きぶられ心や

一あふりしこ究賢あかゝる

ゑけるとて云心や

一あゝてまつら阿伽覚語

や水と翻ずるや

一あさく山まへの詞まで難波津を

とりへいぞのえんまてゑけるゝんまあげをまきせくらぞ

哥の心をも遠ざかりをもつけたるといへり

一 あしはら　芦の葉のしげりしよりて・わか浦を芦はらの浦
こといへり・こゝハ立ずしてこれハ立ずしていはんとてハ悔しきや

一 あさう〳〵　和萬の雨ふるとてさせるしや　　一 あらずさむ　さあらぬかい

一 あさい　朝ねや

おもふらめる心のを　あらずハといふハ思ひもあらずといふがごとし・
今案ハいふなり・かいねらハ赤色といふ心也・かいねらこのむさは・
風俗哥よりおかしき詞也・又くらめの葉ハ梅の葉といへる
ゝまを書あやまれるなるべし・上の詞まことしかる

一 あしたの　その儘しあくべきなれこれすや

一 あかれたるうちをすぐる　大飾表をおきし給

ゑめやぶりきハ垂衣の下まきの袖也

一あふさかし　よそさん後ハ右中将またふられを恨ると也

一あふぎがちとぞある　和泉式部俳名記にくる人の扇をとるまくてとりけるを。東坡詩ニ云ク。摸扇惟逢春夢婆ニ作れり。春夢婆ハ女の異名也。唐土ニてハ、史姫の物をとらすとあるにハ、扇をとられふるまあるや。合歓扇などといふもあり

一あふぎハさくらのえんがさね　清少納言枕草子にある歌のしき物ハ三重がさねの扇。五重にかさぬれば、あつくてところ。檜扇の安方ノ三十枚つくりまで包みて糸まてさらで末をあそび結またくるや　一あつきら　ほそぼそまでのうな。いろさの山さくらがれ結まそあれバたよりあるべし

一あしろハすこしあれたる下もだれ。花凡車ハ唐庇檳榔

庇毛車ホハ、これ檳榔ども也。半居眉半蔀網代ホにハ、

皆あじろをいれ也。今の京のあじろハいづれと定がたし。但

居眉まハ、あ代末濃の下すだれをかくあじろ車にハ下すだれ

をかけさこし、人ども女房の家用ずうるハ八葉の車にも下す

だれをかくるまにかかれバいづれにても遠からず、すらし

あれたるハかかりこそや　一扇のつま代あまて、蝙蝠扇のそし

をれたるまや　一あさくなりや　ならべたる田子ハ泥

中にあるにおかくる物也、ホもと田つまそハ山田のそうだ也

ゆかしい心まハ事ある也　一夜ごとにおもへるとやなる

文選　巫山之女朝為行雲暮為行雨

一あをむまうりとて中家へ引給也。寳亀六年正月七日天皇御楊梅院安殿設宴於五位以上既而内既宴進青馬略云河海抄

一あを馬ちうき此物語第一の巻也

一あさ浅茅さ浅茅生や玄やそなられつれなき人をまちし夜の涙のよりもなきつ心とや

一あしく見の心まどひ夷の稲也

一あさぢ味食也

一あきんどのなめるうにも琵琶行長安倡家女嘗学琵琶於穆曹二善才委身為商人婦

一あをびとを様女激し

一あけまきの童の馬手飼也以の総角なりとそや童は盛名也

一あべのおほし安陪多行

文車うちし物語に略之

一おりいうさんかんくわれの（ゐ）ひら

まことハ童女の上にきる物也。水干(スイカン)めくものやうなる物也。赤色(アカイロ)乃
うづざくら。桜(サクラ)がさねのかざミ。紅梅がさねハ背 袷(ミナアハセ)也。おこめハ二まさも
かさねる物也。萌黄がさねハ面うすき紫。裏(ウラ)萌黄(モヘギ)を云也

一 あまがつ(天児) ちいさき子のする也。三歳(サイ)まで用て後(ノチ)ハ[illegible]るを見よ
おろすも也 天児(あまがつ)

一 おくれひ(?) 大

一 おしなめて何かは人のうへよりおしはかるべし
何かいとど忠心(ていちう)なかるらん也

一 おぶけ 化気(アダケ)

一 おこなえ 袙(アコメ)

一 おさなき(をさなき)まで女房よりハ袷
六位のハ緑(ミドリ)の袍(ハウ)。おさなきといへる。女房してハ文元服(ゲンブク)なれど
人ハ女房とする心なり。地下へ立かへる儀理(ギリ)也。一世源氏子ハ
弱冠(じゃくくわん)ハ六位下なれバ。おけの袍なるべし 花鳥余情

一あざ〃川ろこと　学生の入学の時文章院の堂監ヶ書る
も名簿にあざかと書也聖廟れ字ハ菅三三吉清行等
ハ三耀といへり夕字の字も源ちうしこみべし

一あめのますらこくよう妙ハ天照大神ニてましますに文人もこゝろあ
ゆハ天人也舞姫と云

一おほずらの紙　舞姫の裝束
丑日ハ赤色唐衣寅日ハ青色唐衣辰日ハ青摺唐衣紅絹日
蔭鬘ホ也青摺ハ小忌のゝも也源氏の志文やゝも猶も辰日
のゝおれハ青摺のうても節志色し書るも也青色の紙ハ
蝋色ろの唐紙

一あほのろれゆくしかされ
桜下襲表面ハ普通也裏ハ桜也青色ハ麹塵を号也

一あれるもあしぬ紙るもあしぬ也心ゆちまぎれ也

一あしたゝずとの　蛭子(ヒルコ)ハ父母に捨(ステ)られしをおもふなるの
身のなるよそへていへり　一あき荒田のくいあれより見れ
海賊(カイソク)ハ大波よこそ見えかくるや。あき荒田(ハチタ)あれバ白やうなるね
や。こうさらいねらい。紅のらいねなりせ

一おほうらう　奥(アウ)の字也。行くハおもうるやおもうるハ色よし
くゝや。昔やうれしき紀(オク)也

おる人をあまさきハおしずおちかゞし我身をいたましきもあしぬ
一ある人といふかるしを
此哥丁首ようろゝべかしず。趣しそ題(エン)言の哥をおるべき云詞也。
好詠由也。やまあ宗ハ中代の文字なるべし　秋勘古今恋五。秋といへバよろそ　きこしおぐ人の後撰恋一文　てるよれハまれでおぎ今
一おれをうれしく。それうれ時也
一ま代いろの常くもあま　まつしまねの夜あれ　李(リ)玉(ギョク)記(キ)踏(タウ)寄(カウ)

人の装束縫腋冠麹塵闕腋袍白下襲着深沓皆持白杖。西宮

装束抄に云。青色麹塵袍白下襲半臂白石帯深履線

ノ花白杖　今案此青色とハ所謂以下ごとくもこれなるべし。

麹斗と装持。此二人ハ位袍を着するゆゑに、白杖をも舞

人もてぞ是を持也。舞童ハ絲靴をはくごといへり

一 あぐら　胡床を日本記にあぐらとよめり。楽人の座勝け

る所也。今も楽舎などに、胡床をゑ有

一 あだ心ども　心あさき也　　一 あれごと　あんのごとくせ

一 あからめすそごのも　襖ハ面薄色裏青也。すそごハすそを

紫に濃るを云べし　　一 あいぶちなき　無愛違世俗

あいそてなきといふ事同　　一 あきんやかやれあちう葉さぐる

一あまへさうさふ抱　あまつて
落亂腹也
のゑころ也
一あねさ寸　日ハ異名也
一あかりごろもハ文なくて
一あやもよひ　歩行也
古
さふぢちひとつくさしひし　おかられてよそへて荻ごろもきん。
ひ哥よそて心うべし　肪者の衣をそて内大臣のれ女房あつかひこ也
一あさ日さす　天子を朝日と也。宮仕ニ朝夕を忘れなと也
一あさなれと　わけゐるうべき氏。思を乱てよせる也
一あかまびのさしぬき　哥　同しれさしぬきこや。綺さし氏
蛍よりも織る同さしぬきのさしぬきハいろやう也る時用べきもの。一勤
風流の時用ゆ指貫也。合點一裲也
一あそれれあそび　裳着まれ捨うべきなり

一あしてうらゑ　あしでの文様ハ芦の葉のうらに文字を書や水石鳥なとのかたちを言なり

一あさくら名を　催馬楽の哥ハ芦垣のうるまかやこともらうよてこゑと弁み将うるもうれバ又男ハ我ハかやまにさぬ抽なさけあへれバよそと云心也それをかやのあさくら名を云るすしけるハいふさやうにはましけるに世のよみの哥也

一あさみどり　浅緑ハ六位袍なり紫ハ四位已上袍也

一あさくらあさきさ流れをへて　白橡に二段あるあをきを青色あかきハ赤色なりかたちにつかさどるハつとさうにぱ名をえぐるを得ぬるすや家に伎舞童の装束をいふ右ハ赤色なりをゑらめ下がされ左ハ青色なるよび縁の下がさねや

一あくあくまぎらども（ワれ上）　秘曲（ヒキヨク）ごとのことや

一あじろ車はむかし相得して　昔はは遊びあそばされし事　次第のこと

一あさからずこそ　老者（ラウタル）のさ候ぬべし

一あしこるまりしなや

一あさしろあらこそ　浄土（ジヤウド）とそや

一あしれはあれのことば（ワれ下）　あれさいあられや車のことや

一あづまあそびの　神楽（カグラ）の名也・和琴（ワゴン）を用也

一あはまびのおもておもてそ　折敷（ヲシキ）の面に張（ハリ）らるゝ也　居るればや

一あぢじのうざわうこそ・花文位袈裟也・青袱（セイフ）のことや　青磁（セイジ）盃

ハ茶碗（チヤワン）の名也・あら文は御ろ揃也・金そて襖子（アヲジ）也

一あをあをくうすく　岩文のうすをつくり

一あをさうす摺りのこぼむ　紀　あをきはいろわざ也・青丹（アヲニ）は濃（ニキ）青（アヲ）き黄を

きしかたやうち

一あはれなる世　上代のすゑ也

一あはれさまつむらさき　荻のうへはおとこそあはれさまつむらさきは極也

一あはれなるゆめやうつゝに　世皆不牢固如水沫泡煙　法花経

一あはれさまするもむらさきのもちきて　あはれその道蓮花也

一あさ露のきえゆく雁　今これすまのうら

一あしたのけのたゆゆなし　只気のあはれなるや

一あはれ紀馬まうけし　駿馬移の鞍に随身が栗毛馬にまさるや

一あはれ世　仏は時の花とてはかなの花とするや

一あらんかぎりは　大論云釈迦仏入涅槃之後阿難登高座結

集法経之時其形如仏仍衆會疑仏尊出給阿難成仏登四位之人

也仍阿羅漢等不用之其時阿難自現瑞

一あはれてふ　姫君ハある人ニ命をとらるゝかぞごとくハ世にあらずと也

一あとたえて　八宗世尊ニ宿せらぬ人ハ真実心のたのむ丹心又ハあらねども也

一秋の果つる　四季ニ七日づゝの念仏ま也

一有明の月　十六日以後ハ有明なるべし　匡房讀日本記ニ十六日以後ハ晨月と号す

一あふさかこえて　扇ニ女と人ニいひける事あり故ニ扇書了此紙ニ此歌也　月隠重山兮擎扇喩之　朗詠

一あさがほは　あさかれを山宇治ニある名物也

一あじろ　網代ハ江河ノ列田上よりあるれところを云也

一あじろ屏風　昔ハ公卿ニ呈するためしき調度ニは定まる也深骨片面を張て細組にて閉合せたる物也網代屏風と云也

又ひあじろは屏風と云物也車はひあじろ斗をゆるさる物也

一あげまき紀な 大君とゆうろひあれ段され心也 倚る系の哥を見て読む

一あしずり 躄跑 文選 はらとしてからまろぶとある也

一秋ゆうつ 秋まであるゝも遊びくらしまゝや浮出て詠まるゝ也

一あそびても 実ある心也

一あつまぞめ 東絹也 花鳥余

一あらこれひざつき 花 柿下紀僧正真済・愛宕山に十二年山を出ず 嵯峨の帝若く行をさとりて 内供奉僧正十禅師に補せられ らわと云る

一あなはらうたあん 寝殿の新造

ま須とや

一あわさいふ物 淡泥 獻りや

一海そうし 浮舟の方をちらげし 明日は海也此海は日宇治院にて 僧都浮舟をこゝ付し也

一あまだかり 亭をぬくや

一（哥）あきれはつ　悪く浮世はなれずとかくひやさんと我家をすてずがほ
なくなわゆへとよめるも

一（哥）あぢきなし　雅名事に　なしがあぢきなきと云心なるべし

一（哥）あかとこそ　けふハ蜻蛉（セイレイ）（カゲロフ）や

一（哥）秋のの　此哥野辺（のべ）の露（つゆ）までとぞあゝあゝ此宿（このやど）の露までも
あきましきとは旅宿よりころあるといへり

一（哥）あま衣　織（おり）し世（よ）に旅見（きみ）の袖（そで）とあま衣（ごろも）かゝるあやうけて
思（よ）りんといへり

一あだし山　雅名事に　夜山（やや）也

一あいしう　愛執（アイシウ）也

さ

一さうし（ざうし）　曹司（ザウシ）・局（ツボネ）也

一さうさう　葬（サウ）（ホフムル）也

一さかしら　賢（さか）しらごとや

一さうぞく　装束（さうぞく）也

一さう／＼ さびしきや。寂寞

一さゝめき 耳言也 さゝやく心や

一さはさやうは花や。さうざうしき心　一さゞう さゞん花や

一さう人 うつかしの上手を云　一さえ 妨や

一さゞめきて 騒や　一さうえんは まうじみて 侍とく

讒上をいふや　一さしもあゞめき 深の心なり

あなびとやすき人は心とめ給ふとも讒上あるまじきなり

まけつと云儀やれども上るすてゝもすてゝぞあれなくる心になし

云心をまかせてうけるを　一さしぐし 洞の出入心や

さしぐしは袖ぬしけるに寄は駒りや。それにさしあつての心や

一さしあつき さしあふぬるゝとも神や

一さしも　さうなや

一さそ　さうでや

一さすが　流石　身主人也

一さうじて　惣人のなや　正

絃の琴也

一さうれて　第也。常乃十三

一ざれもと　ざれごとや　ぢごとは心なし

一さすつれん　龍鐘也、おちぶれたるところ

一ざうじら　雑変　ざうしくのなや

一さくらみれ　蜘蛛　ひのまハひのくさ云草伝ちへてなめか。

一三史五経　三史ハ、史記漢書後漢書　五経ハ毛詩礼記左傳尚書周易

一さうあうて　さあうあうにせ

一五月のもち　五月五日天皇菖蒲のかづらをかけ、武徳殿行幸なる。内弁外弁節会の如し。宴酒首献菖蒲内侍

女蔵人續命縷を群臣にたまはる。一献終て。六府騎射乃ことあり

一 さし・げすと同じ也・さうし也

一 さゞやかなるは細也・細許

一 さしたへて　打たへてと同じ・さしてと也

一 さるべきされはさるべく也

一 さけど　遠ざけと也

一 さりげなくいでずして人のことゞめのやうのすがた也

一 さゞやかに　髪のさかりしたる様也

一 さうどけいそゝろしきゑ成也

一 さしもてうしくさやうなれどもさしもてる也

一 さるべき人ども　いまれ分・紀の守也

一 さしうちしうゞそ也

一 さ紀もをつたも端えず　内車乃

さ紀払ハ第一用心也。変化の神ニ望まれ申さん為也。されど
さりはしのびありきあれバをもを給ふぬや
一 されうつや戸 さやれるせざれうくの數也
一 冊さく茶よ うつてふとは。うつてといふ名也。てふハ云といふ詞也
一 さかきひもろハ 若 童女也。一説さしめふくうろあれバ浄衣
のめしつれられうろ童子とうるべし
一 さかべきうくりてすませ奉る 封也。すませハ のきをも
なをするも
一 さ紀の守さぼちのむすめ
前播磨守護也。さぼちハ新発也 初発心の尼也。明石入道也
一 さいつ比 去比也。近比也。一万葉よをとらくひのさいつ比とあるも
一 さいへど さうハいへど也
一 さいなまるる 河 [illegible]

一哥 さしぐさに ゆしぐさはさしもりや

一さうれかえ 笙(サウノフエ)
と云也。中さゞも中此也
へらや

一さゞすゞさゝ まさひのところ
一ざうしちゞして 扇(つま)にさして
一さしら心おち 比翼の月ハ紫(ひめ)

いちよ心ありき人あればよきまであそび抱と添の心也
一た満門(まつむ)のめれと 添れのれと西人あり。才土(ざい)大武(だいぶ)。木工右満門(さうもん)也
一さべこさ さるべきさ也
一哥 さとひぬ そくの里も月ハ
きらねども。入されし山まではいらぬ抱とも。たゞ中将の君あくつゞきうつ
そまくむ心也。入され山 佐馬(うどま)の岩本(さしよ)あれば。こゝ家ハ月の入山也
一されろくる 在礼霞(されくつあかき)南時(まうど)ニ抱とひとつふちハされ心也
一さまよ 小里(さとみ)也。きつめて思ひ定をと云也

一さうかひ　髑髏(さうがうそうじ)荘子やきゝしはひや

一左近(さこんのしやうげん)令ひこのうねん　皃(ゑみ)のおもさ人なし

一さいおぼしめす、花は一脇の句に強うある表着(うへぎ)ぐらゐま

つまそそろせぬつゝしむのふしや

一さわや　されどもよそとりの句をすて

一宰相(さいしやう)のすゝり　参議(センギ)は賀(カノ)行事(ギヤウジ)延喜(エンギ)十六年、亭子院(テイジノイン)法皇

五十の賀、雅楽(ガクノ)行事(ギヤウジ)宣旨(サイバイキヤウ)参議(ソノトキサンギ)忠　左大弁(サタイベン)

一さんざしまさて　参座(さんざ)乗(さんが)賀のうす、出世の事なりや元日よりす

一さんのちゝ(そのうへ)　手　弘徽殿(こうきでんの)南おもてよりたつ廊(らう)をも、第二の戸の世

一さうかうれうにて候ほかはなし　此句は華巻(ゆきまき)をもあるま

此今(えんるた)朱、此物語は二事はかゝぬ心はよろこひのうす　とかくわらふれ

一　きぬハからみたるハ何までも。紋ハなけれども。ひしハ一をまでもさうなる
拙やくらきら袍の二重も袍のごとく。唐装束とて着たる
るすおりたれハ下がさねといふ人のあるハ。唐の綺を用ひ也様
のうれハさはれ面白くうつされたるに。蘇芳のいろをつけうらもみせ

一　斎宮ゐのひしは　[illegible]　斎宮卜定ハ去年あるべきなりや。此
秋野宮に入給ふとぞいふ。則明年ハ群行のあるべし
寺　斎宮ハ代々に一度などくうしを給ふ。朱雀院にいくをおいて。
斎宮の卜定あるべし。斎宮の起ハ垂仁天皇廿五年
丙辰三月。依神宮託宣奉祝伊勢国五十鈴河上以斎王子
倭姫命令着祭給是斎宮始也　河海抄

一　斎院　嵯峨天皇弘仁元年置斎院。以皇女有智内親王

母交野
女二　為斎王一。神皇正統記云、凡天皇即位ニ定之賀茂大神斎王一仍テ
簡内親王未嫁者卜定

一　かずらきちづら　神事の時の心也

一　斎宮は左衛門のつき　左衛門のつきとは伊勢にて云きのこうや
さだめられて後内裏の後涼殿の前にしめて初て斎宮入りせ
らるゝまでへいつも給ふとなり也。是は左衛門府に後まのそとなり。
数隆説云。伊勢へくるしせ給ぬとて、三年斎之間卜定す
るに、又内裏の諸司へいくせ給ふまや。給ふ内侍也
左衛門府あり。近衛陣限まて左衛門府あり内裏より一町の
ほどに近衛より外は限りある東殿座にて丹ぬりたるも今絶
たるも。或説云、左衛門のつきとは、左衛門府をいふ云々　孟津

一　さしぐし　皿よ抱之入る也　一　さしあつす　請文也

一三千里のほかの　三千里外随行李十九年間任轉蓬　在昌賊蘋武也

十一月中長至夜三千里外遠行人若為独宿楊梅館冷枕單

床一病身　文集

一釈迦牟尼仏弟子　弄金剛仏

手束なるごとくの心也

孔子至今不越境

一さらひをさうて　左伝云公卿

一さとし　幾瑞も奇怪も諭之

一あしざれのつゝくまで女ゐ家　或説嵯峨皇女發子内親王手女

家のよゝまでおほらし。昔はすゝを謂語也

一さけさかなそゝし　殺の字也　慈殺なども詞にも侍るなり。つくしう全

うれへなきこゝろ心也

一さやうまにて語し夏めでたち

源氏の故院とれ。嵯峨にて語し侍り。おもしれ巻にきこえ

一さながれおそゝしくて　前用也。抱えうひいきをことゝしてと云也

一さしぐしのはこ　ちよしや弄　故実の類まさしかへき頼ま、
さしくしさいへら　一在中将の名とハ夜つかの腸
ときさゞめ始也。在原業平ハみかどんの孔子。右在原を云也
一さくらびれちるとし　常此更衣の裏ろさ積芳ありしを桜冬を云也
一故院ハ此かくまて　故実ハ此一代一家。故院ハミろ才る腑あれど
わかあへり　一さしぐくりて　ちにたゝみてや
一さ梅くびあこあまぶれき　童八汗衫とさ作れざきれとたし始
こそて袖ぢらこさうろうや　一とくめさうかうがまうしく　猿楽めさる
引と云心也。猿楽起ハ聖徳太子。秦川勝ニ御て作ニ云十六番面
人ゝる内裏紫宸殿蕃芳まして舞まうろ。于時太子以其神
楽字神字をさけて名付て申楽と云ふる

一さい人　才人也

一座のともとうし　寮試の
日ハ長幼をまて席をちして人の種姓ハいはぬや故ニ冠者の
聞色・学生ハ末座にゐあつゆるし也

一さくさうをよむすけらう弄　さくしくさし色うう心也

一さくら此ほそおるよはやくるうひねうそへて　偏ハ面白裏
えび染也ひねうらうすさ紅のおや此ちうらう也流やうかるうハ
うけくし也

一さくさう植のうちさ　何色とも
えずおげつるし哉

一さしかず　さうかちよ色・さし
かずうさ・不出也

一さうそうせ　舟の装束也・屋形の
おほひ幡の幔る也

一みなよ　母よあうくれへさ　めりよ
ハ人よ色めよしいえう

一さうぶかされ　菖蒲ハ面青裏

紅梅也　一すゞれのこのむかし。むかしの

うちとけたるを引くて云也　一ねまち　唐の書にねまち膚。

そこはねまちと書。心は月也。おとこをまつとよみて。女は其心

してひくべしといへり　一さゝべきまつちさみだれ紀

たわまと書。公卿のつすや。呼法院也

一さんの朱雀院　義平此比門世氏常は宇多帝を朱雀

院と申也。今朱雀おりしますゆへに前の字を入るゝや

一さしつくん云ゑへる也　一さがれこうどの古万葉集

此古万葉の事諸抄さぶるしず。是楽古万葉集をて別に四

巻ある也。さるあるき云をこ侍るに。古万葉序ありと。云々云

これは世中也。ちりやうとちられば。御代ちりまけり時のみだりく人

これハ世中にちかくなりてもさかへ行時のみかとくへ人

一 人の年つもりをあつめて。万葉集となづけて。おほくのよつぎぞ。されば
あつかりといふなれあまくしきのそひて。よみ人くらずぞ略て
嵯峨の御門の御撰也
さうかを唱歌也

一 さうかれ蓮上人 唱歌蓮上人也

一 寄 さしあつけ 秋好中宮にくち
あひし時。えあふなれまいひたれ。くしのそこにあそばしけるや

一 寄 さしつぎ 秋好中宮に女三を次まといへり。さしつぎ。擬の縁也

一 さうれの御堂にて薬師仏 見二松風巻一 源氏の建立 栖霞寺に比い
すゑ見。薬師ハ寿命をいのるゆへなり

一 さいそうわうきやう 最勝王経 金剛般若寿命経 河

一 さんぐをきやうも 四十賀以後。経今の例多 花鳥 既宣云
ハ貞観十七年。誕生して。七十七にて薨ず。貞信公。延喜十

九年四十にありて七十歳まで薨ずる例もあれど多に

つねそのめしすくなきとはりけりや云ゝ

一 さゞのかの岸に 沙婆かや 善導大師偈ニ誓到弥陀安養界
還来穢国度人天云々

一 さうしのつま 双紙のつまや
あれのさかいをいふ

一 さうだん 雑言也

一 ほする○ きさう○ 也べし

一 星と紙ニ 藤原家まで八飛洛京

一 さしこそいふへのものに よろしくの

一 さるまかさ 六時の念仏

あいめあしや 神社のあめし 紫のうへのかくれなし

とさめくおはしとさすれるとれ心也 中将心ニ添ニあひし

ここ心をるなきとめべし　一 さくちやう 錫杖也

一 三条斎を東ごとに十五日て うつかれ撲の人を云 奏上左のお

一　三条前も拾ひ十め日て　うつけ樸のたとも参上たのお

ちぎり家の君は歳やとうかりしうそそ十め夜てかりしつらさ

一　まきしられつまにすある　萩と麻呂草といふや

一　まんべさまやおりしけん　官位るすゝとあへさ君まやさや

一　宰相の中将それ秋中納言る嫁給ぬ　その秋さい此歳ま春宮治
のれ様ましその年れ秋と心へべし此時分と紅梅行川まおるず
し年比るまま菓式歳の秋と心うべし

一　さぎらわれいとなべき　今始さるまうとおらず志をまへる
めらんし給りん物とよしや心のそまそしれるや

一　さまうるを　をそるうる狩いあすくらもぞとぞらちあれしゆへい
あるべきとの心也

一　さくらも　さくらあけて泣給也

一　さうし　倍まさずまや

一　さうれ院　漢氏嵯峨まれとし

ましてのりをまへるよしや。嵯峨天皇大覚寺にて遁世ありし
比しそうけるを　一 さうしひの別当　簷上人と云。
別当ハ左京大夫なるべし。左京ハ左大夫也。禁中にてハ弾正乃
別当右大臣なるべし。弟をあらそふなや
一 さうえし　弟の盃にあへて　あらくがりて　矢盃をハ懐中して
退出也。それをさう〓と云元　一 さぎうるる　あしつまさハくと
あくろ耕　一 さう地のつくる　白拍のくん執
をいかゝしるへる　一 さうしく　雑事くゞ女房
記めし出てつくへしへと也　一 さ陵くてけるも　寝殿を作設
ふうと　一 皇びくう　上臈しろくぬ心也
一 さしこむしり　四阿・四方へ葺出しくう前と云ぎしをしりハ戸

とさして之しく慈をよせるろす紙よそめへち

一ざれうた 古まえ ことびころまさや

一里紀名を里の名いうきといふ紙秋身うしれをいろうきさ也

此寄彩拾遺部中ニハ紫式ノとおり

一されごとうき、ひじやう ぬ紀推章也

一さらびさら 里るれさら心え 守家一犬吠放歸群羊引

積求河

一さいえん さらびえんの心

一さ庵よふ 棧姑

一さうやく 雜役也 若棠 總角の八濁也 茅葉ハ隆也

一さくぬまれ 不忘別

一ざけ 邪氣也

一さうしおろして 清下也

一さくびやうし 笏拍子也

一さしき 棧敷也

一さそなけなぞの心

一さしちうごう、されがく也

き

一きハまハあしぬがうらにつきてそれほどれ分際にてあるきと
やきはまきりくりま良あしぬや

一きしき　儀式也　　一きよらあり　清也

一男きせ路　起手此物衣ニ。行まても云へるべきをしる
きりゆりとるも。又男あるすきもいふ事なるべし

一きりつぼ　淑景舎と桐壺と云也。此舎の一也。弘徽殿　麗景殿
宣耀殿などゝ云也。行馬道でまありてあまたありける
ところ也。此舎といふハ。桐壺を淑景舎。梨壺を昭陽舎。藤
壺ハ飛香舎。梅壺を凝花舎。雷鳴壺を襲芳舎といふ也。
いづれも大内裏の間を言へる。局ハ桐つぼと云也。源氏の母御息

所の往かへる所也

一きさいのま　后宮也

いへる心也

一きさみく　刻ゝ也

三昧より出て法花の三周説法と比なり

弘法めさくうさ也

已下二字

一きうくとうくる月也

一きやう　饗也　饗は振舞を

一きびも　稚　日本記　おさなき也

一来名れハ　夜道のかけ也光より

一吉祥天女　佛の眷属なれバ

一きぬの喜あひ　夜をひえ

えそ〇ハ打衣ちかさる庭をさる所なるをとおふべし

一きさくきいと　男をもちくる人あれバ重ねる人をかやうの
たゞかれぬまじきとや

一きうけざる枝をめぐち
相まうき〇そ　かちはらたる垂れ也

一きつれ　ゑて　ねくるを云なり　ゑ〇と名付　氷流之妻

一きゝさん 隣家へひくきは何ぞや。いやしき女の名也

一かゝ山は何じ寺 南蘭山ゝゝす寺れすや。昔ハ四十九院ある

一きしきくゝん 儀式官 政官也 ひちまちハひちをいふ

くもてなすや 弁大内記木升ちゝし

一きやうゐハのうらくしけうけのこゝい 故常陸のこゝやのれ

たるしや 境基 唐運 搔上 燕 搔撥のこ足のゝうもれや

一きさくことだ 聖詞童句翁詞木の類也 荻壹ハ東立后だ后

がねなておゝしませど。后詞とのなふぞべし

一きゝをおもて右大将さしゝへさ何 狭頭変後撰 立女八の

みゝ光良の法なのるめる。四十ゝ幾し侍けゝは菊の花さき

してとゐ

一きさくゐなふ 中宮は立あ也、

なつかのなや

も、玄輝門の方也

心也。うらつくしきあらぬぐさ心也。おもひやる心にも用られ

一きんごちもいづちのぞ給　弄左大臣の息遊望官治也

一きさらぎ晦なる　精進の方へハそて也

一きやうそく　還遊させらる

一きうれぢんま　中宮の和の陣

一きしれ柳のくしきあらら　柳ハ非情にしてあらも心あり。風に

まほて気をあつ。漢武帝の爰斎柳ハ一日ニ三度おきふし

けりゆくま。人柳と名づけらり。又三眠とも云也

一きしそるま　ひずみされハ。霙をまへてやがれ消ぞてまみるとや。

一きさくしハ泪の心也

一きらねのすくるま　梟鳴ニ松桂枝

流蔵蘭菊叢

一きゆる玉のちく　ぬるとり玉

一きんまち　云箋繪師・蒔畫

おり、是ハ黄なる也

名瑠　宋安石巨勢金岡と云忠と云箋也

一きぬひけるけ　松風の宿にかめしよせられたる家あるけ
の袖色あれども、紅あくまで女の装束をうけるようしやうけ
ほの種の奏る、やの装束ろうけるきんまで言ひ

一きはぶけく　きりくもや

一きんぢうハ　㴒等也

一きうし紀の女よ日の仔ども　朱雀院ノ行幸あり。北ノ対ニ之
時ニ行幸上皇家、例行二天長十一年正月二日。仁明天皇朝二朱
雀院一拝二母后ノ御所ニ一。同宿謁太后ニ拝見二一其ノ主記二

寺玉かつら
一君ようしも心ゆかりて　苑　肥前國松浦郡鏡神也。太宰小貳
藤原廣継霊也。又鏡山も神功皇后の御鏡化して石と成

行を境山といへり是をも境の形と云べきにや下の句に松尾大原野神社同社やといへるに付て八石清水八幡と同躰のよし申侍れば是ハ境の形に二の義あるべきにこそ

一 きうりの人まで すくや也

一 喜春楽 呂也双音ハ呂より律ようつると云也喜春楽ハ黄鐘調の楽也平調よりもいうし、用らまや双調 くらしき律の呂にあらまや呂律分

一 行香の人ども 花籠塗香あるとかつべ人也我らんのさかまや

一 此おりて ぶつる 北面ハ北の方也南面を嗔の方とすうおや

一 公忠朝臣 号滋野井弁 光孝天皇御孫 薫香甚物合好交也云々

一 宜陽殿 日華門の北也紫宸殿のつぎ也累代の宝物とぞ所なるべし

一 水のまん所の別当

家司也。女房をバ北の方。又北の政所など人まゐりていひ入る。
紫上ハ大方源氏の室家の老しき北の政所といふらん。何すあるんかと云
一 きやうしやうなりや 軽ろや。輪のまや。ゑぐらぐるまき拵を云也
一 きんハごゑをきく 琴よハ女のきくべからずといへり。河海一よハ
撥ハ二よハ片弦。三よハ水字。四よハ蒼海波。又よハ雁鳴調
是也
一 さよつゆすまうするもちろん
雅楽もりまうへまつりつねを。やうる感成され也。礼記よ
四十を超て仕といふあれば相当今女又六允
一 幻めぐりまさちやう 唐穆宗ハ毎ニ宮中花開ハ重頂帳
一 ぎをと 編儀妙べし 一 君あゝして岩のけるち
八ツ宮以後。往還も絶ると。おぼろしハ何さるさ。

一 えいぐわ八代のおりしまず花のもてあそびぐさの也

一 きしめまるれぬる指ぬる絵は大きにをきらし家の中大きにれも
もうろきもおそろしきこともやし

一 きんのふ 琴譜や 河 今案天暦三年の斎宮の女御徽子也。
九条右丞相の女也。延喜の帝の女勤子内親王は則九条殿
の室に侍りけり。是によりて延喜の御門の勤子内親王
に給りをかへる箏の譜を給はらしむ。今の此譜也。
六条院の女三宮に伝へたまひし琴の譜に云あるなるべし。
并 墨のうつせ給紙うすむらさきつぎ紙也。此例 多こゝ

一 まるくひ きせいたるゝ 碁聖。備前掾良利。肥前国藤津郡大村
人也。出家して名寛蓮。為亭子院殿上法師。亭子法皇出家に

志のはれとも志けるよし大和物語にのせ伊勢が碁の上手なる
まよりて碁聖といへり延喜十三年五月五日碁聖奉勅作碁式
献之
ろ

一 きしさらく 此世の岸也
と尼よさまあして鐘も多心をそこさんとあり

一 きうるいづく 黄泉也 日本記 伊弉冊尊のよみつ国へ入給也
陽神おそひかゝりみかへりみそれを伊弉の浮舟君おそう
比して見けるれ

一 きんそん家 競也おもそふ心也

一 きうびね 岩よ三歳人をもせむこぶねもむこの器量也

ゆ

一 ゆきさふ 交加と書 ゆきかひもおなじ心也

一 ゆげいの命婦 靫負と云也 矢をいるゝものとりの宮

一ゆげいの命婦　靫負と云也矢をいるゝものゝ名也。

左衛門ハ弓矢を常にもちさゝぐるによりてゆげいと云也。
命婦ハいまの世にハ内侍の次の職掌をもちぬ中らふと。昔ハ
命婦と号ちかし。但已下の女也。蔵人と云ハ下臈のこれを云
賀茂祭に命婦づつひ。蔵人づつひとてあるなり

一ゆふづく夜　夕の月夜也。夕附夜ト

一ゆきひけりかなや　　一ゆゝしき君　いまいましき也

善悪につかふ詞也。ゆゝしきことをもゆゝしきともいふ也

一ゆいごん　遺言　　一ゆくへの　ゆくへもゆくときを

一ゆふつけどり　こしハ鏡也さくや　　一ゆかしく　ゆかしくの心也

一ゆふつけるひもとく　深の縁をあらしぬを云也。あへに

くれぞくしぬふすゑ。袖あだまでくしぬふ嫁くし

一ゆづる　弓弦(ユミノツル)也

一ゆるひ　寛(クワン)也　ひろき心也

一ゆくてのなごり　つゐでは旅のとちうの事也

一ゆふつけて　ゆふつけてや　便宜(ベンギ)の義也

一夕ぐれのちまた　ちまたとは巷　末つむを云也

一ゆきうきくれ　あさからぬ事也

一ゆるしいろ　紅紫ははふかきいろを禁色(キンジキ)と云也　あさき紀をゆる
しいろといふ　諸人もきる故也　制禁(セイキン)にをよばざる故也

一ゆるひあるき　心ゆるしあるきや　無由(ナキユカシ)路也

一ゆし弦　由(ユ)也　左の手まで　覚えとるすや　弓心わろきや

一弓のけち　弓結(ノケチ)也　踏(タフ)所後(コウエン)弓結(ユミノケチ)也　これを大人よりね
ひてをられなるや　小弓の夜の真のしんおうや　ぶ弓を勝負(シヤウブ)に

いろやつゞみ也

一ゆふはつけて　復鈴輩國忌

郷ノ祖天日鷲神造木綿者某記

一ゆふだすき　木綿を襷にすると云也　旧事記ニ云以天香

久山之天日蘿懸為手繦　古語拾遺ニ以蘿葛為手繦

一雪ふるさとよしの　雪深き

さいくわ

よしの山にかさなる所にまとやよしのの吉野の山にもなかる

ともの寺の歎也

一ゆきさやかなる　雪國也

一ゆくらもろくへんうらも　劉晨阮肇　村詩也　天台山へ菜

をとるとて桃を取て食し　里にかへりて行にて仙女に逢て

年夫婦となりて旧里にゆけば　七世孫に逢さと云　劉晨阮

肇二人也

一ゆきかゝる　かりの袖さは　延喜

帝の行幸あるに出るなりや

一ゆめまぼろしかんたんの夢

れ心元

一ゆざけき ひろくいは兆しき

心也

若上

一ゆすらつきうけの花 ゆすらつ

きは鬢（ビン）ざうしの花や・ざうげの花いかにゆふかうがふき・ものの抛花いろは花

やうちかはとおもふ

一ゆかまそかて ゆかりまそうとは・結

とよそくそうすや

若下

一ゆしおんする 由縁（ユエアンスル）ゆかれゆう

善れなりや・おんとは抑（おさへ）ことや・琴の手仕（てつひ）や・弄月とて

一ゆふさあれと ゆふは調子（テウシ）のさうら心のゆ抛まて各まりあり

心まゝちれそてまゝき抛や・されば夕霧さめしてきこえ結（クミスル）

りんとや

一ゆうきやうぐんりつる 天與

善（セニ）人吾（ニワレ）不信（スレ）右将軍墓草初秋（セコツシャウクンカツカニクサハシメテアキ） 紀在昌 是は右将軍保忠（ヤスタヾ）也

うを詠たる詩也 時平見 ゆゑ代とせしかば韻字有詩は秋とあるを今あらためてあらしと詠じたれども心優美なる抛丸抑月の比あれば秋の字まではいはず季節お遠きて翁に時鳥の気をまねし
さいひくへるは數多し 又大無句碑とも唐名に金吾将軍と又
ば拘抹の子世孫魚に紛ろはしく詠話也
一 すむし
ゆゑしき紙 ゆふけさいは居待の心也 さらされば弁舌すれ
らうろうや河 寛音
一 ゆふべのちよとも家あげある
旅 各侶ども比布施指抱あらじまちらくして されが寺に上臈あ
さまでつまをげるや 僧どもらくわけるといひ 詞につきて 夕ま
あとかくけり面白しといふ
一 夕れ露 雅家貪名利夕陽
犯子孫といひくへるある也

一ゆきゆきて汀の小ぜり　小芹ハ摘捨よろしき物抛ぬべし。八家

たゞしまさぬゆへ〳〵まるきさとや

一ゆすりの名残　接従すやうにあしひかふる心ちあしきさとや

一ゆきわたりて　動や

一ゆきまよ　雪の夜也

め

一めざましき　詩冷眼とうけとめずましくもゆる心ちあはねむ

心あるべし

一め紙そはめ　側目　いまれあり

てうわせ

一めづらしき　珍奇　捲仙家

比詞ハ神功皇后松浦にて鮎の釣よりたれまけらせ給んじて

めづらしさ作りけるより始りや　松浦も始ハめづらしや

一めくらの紙　馬道がひろきやうに作るべし

一めくらのうへ　馬道がひろきくらひたぬべし

一めつぶく　めんぼうや　　一めどしつ　一文字眺也

一めくらしきれとう　目のうへ瞳ある心地や。まぎれある心也

一めくら子　瞬 めまぎするや　　一めもおやま　うつくしき心也

一めいまうのれ代四代　弘安源氏論義とも。貞信公のおまうけと

いくか。親行説同じく桐壺を延喜に准ぜば。陽成光孝宇多醍醐

とならべさせ元。天暦云元慶四年誕生なれば。延喜まで既四代

也。于時左大臣也。去比擬するにまされ也

一めくらしき物得きて　課や車代立所なき時分にはなべし

一妙法なのべいう　江州まへ。神崎郡高屋に。妙法寺村云う

一めしうきぶちて　世俗にめしあつかひのごとし

一めぶくめ　目ゆるのや　　一めそらしなくう　感ずる心也

一めしく。めでたき也　一めしつぎとは　西宮記ニ院
宮雑事ノ中ニ随身ノ勤ニ行召継養時云々今案親王家又召
継或アリ宮明親王嫁娶ノ時召継笑下ノ綿二疋を禄にたまふ由江乃
記にみえたり。白氏文の中にも見えたるべし。又知足院殿御記関院
の傭子として召継を見えしるまつえし也とのたまハれたり厩舎人
なれ。五位六位の例にいはしくみへ也
一めじろき　瞬めくるきと同　一めともれまありなるれめまま
目兒也　めてしちされるなれ

み

一みやつくまつけても　礼記官学の二字を云へつくへ物まれたれ
まことにあり。世間文義もさしめまる文づくへ也

一みづからは御孝也

一此子いくてもめでたきはし（貝下二十八）くれど河海三番後延喜の御代の定よりて七歳以前は無服の殤と物忌令にはあれど延長七年に定めて寝に忌をうくるは延もの事にてあらうさきて不審ある也

一家まれ　家は禁中にて小家あるさむすらは洞をいふ小家は若家のる也

一家のうちにはめさんする　寛平遺誡外蕃之人必可召見者在簾中見之とあて河海には家の御本文に遠すといへり
蕃鳥必の字ハめさずして召すましき時のこと也　然は打まりまして
めすましき也見るを

一みやもす　こやもんすこともや
文表の事やれは御紙うとゐひていづれをもとこやもとすこと也
矢子のみやすとすまいりかるゆへなる也

一みづゆひ　びんづゝ也

一みづし　御厨子

一みゝはさみ　ひぐきを付也びんの髪を耳にはさむ也

一み三枝　三葉　さしずかある心也きゝはらしぬを云也

一みそであつく掛けるとき　官位のあさきをいふ

一みそかには　ひそかなる也

一みくしげどの　御匣殿御匣殿別当

一みそぢぬふ　截縫所をいふ

一みしらさき　身をまかせおつる

揺を云也

一みいれのはかま　御家にはく

までこゆるさ波也

一みさきの松　御前の松明ぞあかし

まつさを云也

一みをけさうじ　御をけさうじ也おはん

吉野金峯山に入は百日精進也なかる当来の導師弥勒也

一みつくき　水茎也

一みつぎぐさ　年よりぬれど

膠じまり背(セナカ)ぐじまりて。二の膝(ヒザ)どうりて三中に頭(カシラ)あしらひて。

三の猫とらへるがごとくや

承香(ヤウ)や

人にうらんとや

一みやうがうの　名香(ミヤウガウ)　佛に手

一みや人にゆきて　宮ハ禁中(キンチウ)に

一みぞこさやう　頼れ祈禱(キタウ)のことだ

や。趣おもさやうはちる。へまれをつるまをいふ

一みても又あかずよ　あひそて定まらざるごとく。只夢(ユメ)の中のやうなか

れば。夢にまぎれて消(きえ)うきまほしきとや

一みつのなまて今一しき　琴詩酒(キンシシユ)の三つや。今一しきハ酒なるべし

一みかうしまいらせんとて　趣かけ掛紙にかうしをあげおろしするを

新かう人にみせることとや

一みもてん人に　源の氏深(スカタ)を掛紙

一みうちされ人　前　今業れなと

どきれびんは東つ人ハ宗のこゑの声長を見て莪假すると
うちこゑ人ならんや　弄　ミうちこゑとハこゑのちをしきいかや　荻
鳥啼耗不審　一　みそくけ　出衣架や　衣荷
一　みをだちハひゑて　蘆を引くや
一　みちのくるがき　種繊やまゆこれるや
一　れ八くう　毎年　定れるや
一　みしいあくあつハくるし　みしいあくこハ桐帝　おつけとハ源のるや
一　れをつハうちれ草をげく　古墳何世人不識姓兼名化作路傍土
年々春草生　承天　一　みる你ござ志り　粉のるや
月家まるをてうあるを　一　みきごの流めをさく　みめこむ
べし日本紀ニハ妃の字をうてもちぶまへの行るまハ姫ぴんめをよむべし

一家のかめあつまハ　龍宮（りうぐう）也　一みやこゑまくらんとも　御内大臣
伴固云　懐（ハン）秀よりひそかにのりて所為あひ給ふ事（キコエ）ある罪（ツミ）を
ぬそ。ことに大宰府（ダザイフ）へながされまつる。菅原（カンケ）摂政まことなる
一みちのくのそて　左のりちがひなる
一みそひつあまるハ　御衣櫃（ミソビツ）あまるハ荷（ニ）也
一家たし経めぐり　家柱（ミヤハシラ）ハ蛭児（ヒルコ）とうそての経也。めぐりもそれなる也
一みつのや（よるもふ）　三種（クサ）ハ門屋。井屋。厠（カハヤ）屋。是三屋也
一みこそくきつめれ所（歌合）　きあれかどハ禁中のかどと云心也
一右ハらんのここまきんかうれ下づくえ　天徳哥合。右方洲浜（スハマ）沈机（ノツクエ）
香（カウ）下机。浅縹浮文織物地敷（アサハナダウキモンヲリモノヂシキ）云々　龍今案右方絵（エ）ハ沈の箱（ハコ）ニ入ル。
花足（ケソク）ハゆあうしくきられる也こしこら。柯ほそつくられるこハこし

ずきんかうハ沉のあたりを云。下机をつくれり。打敷ハ下机にかけ
地敷の書地のくもれ綵や。是ゆへのくもれは。花足をつくりて
かくしも河海にハ魚くの糸にてむすびたる也あされたる結ばつ
あらし。是ゆへのくもいハあまびむすびや
一民ア為輔卿に給りて　民ア大輔伊行　兼明親王二男　なりとうへかう
一みしかの露まするれ　ちかきあれ巻に或宮の姫宮に椊なかし
とみしるや。哥の心もおもく對面ありてきこえかし給ひ。斎院に
て久しくおりしられバ我も人も年深て何するも昔にかへらぬと云心
に宮のさうもさめなんとや
一みそへて後も待こよ　松風に
身をハ入こ云ころハさ海をくへくるや。是ハ身まかりぬべし。後世をさとりて
ちらんとや
一みそてあきあげさせ給　香爐

峰雪撥簾看 禾天

一 九門のれいしきむすめも康子

内親王 延喜皇女 村上帝の時弘徽殿におはしけるに九条右丞相おもひてまいらせ給けるためし多し 一 みかどの御むすめ給ふ人もなく

時同父節とくめ給ふ例のすくなや 一節 父節を家仕へめしを

うらみなる君おほき意見によらまし

一 みかどのうせさせ給ふ 六位の人の文よろこびもまゐらせや

一 みづ鳥のくらゐまでくる 各よろこびもあるさき心や

一 これあしまいらする 足をさすりまいらすや

一 みづむまや 踏歌の人を饗応するに肴ちらしとは水駅と云ゆ

つけ領などに用意あるによりてや駅と云は駅路に馬ありて水人

よい肴酒など用意させてすゝめてもてなしするに喰へくらるゝ

折る袖に出て路ゆくれ　一み狩ちげうろにまとちう
才をすて勝負するや。手まとりいる狩くらむ筆也
一みてぐらに述あれども詳まうづるひめへハめづらしきものなれど
ひゞる　李部王記。鷹飼親王云々着地摺布衣及袴。或ハ象木蘭小口綾襠
襖子餌袋　今案。是ハ王卿の鷹飼の装束也。布かりきぬの摺
の文あるをさゝろ。袴も同。或ハ象木蘭地のきぬのさしぬきをもさゝろ
定なし。襖子ハ下まがねするきぬのすそや。餌袋をさぐくべし
冠ハ巻纓の冠をさるべし。仁和芹河行幸。行平中納言。大鷹飼の
うら衣よ。鶴を文にそめひつるを。王卿の鷹飼のすそや
一みゆきのあかいろ　延長昌泰行幸の例也。法皇ハ必赤色の袍あり。才
一の公卿ハ生の色も同きすまま。河　延長四年十月九日大井行幸

上服赤色袍黄櫨染袍文竹風晴儀ニ法皇赤色袍着する時ハ
主上赤色の袍を着させしめ給　余ハ略之

一みあかつ　見合や
そのゆうすとろへ云也
あしく云同すや
侍従梅花寛撒侍従記ニ云。春ハ丁子加蔵あるべしとこしられバまち心とちや
そして云え

一み山まもうち　三山本ハ。天
一みちか風のちやまし　乱ごくら
一みさあり中ま河　三種ハ。皇后
一みあれ　みあれハ。玉依姫の別雷ノ

神とうく給し家経云まや。さてれ生ことを書則くくちをあらし
かくる故まれ形たる也。神館ハくだすされおやられらどとさこうと
云家まあつこつへう。日本紀ニ云。神聖生其中者。或れ禊。祭のおの一日
とれ禊日と云やれ。生家ハ神館まあつとさ云う。祭時れ従家あるし

一みちのほどをわたし給ふにはしき〳〵筵道(エンダウ)のうへの布(ヌノ)は
簟(タカムシロ)に錦(ニシキ)をしかれたるを云也
一みづしどころのうへのおさ院のう
ひ御厨子(ミヅシ)所別当(ベツタウ)一人預膳(カシハデ)ア滝口(タキグチ)女人謂鵜(ウ)飼(カヒ)江人網代(アジロ)等也
執あり呼 六条ノ院までのうや御厨子所の鵜(ウ)飼(カヒ)のおさには内裏
にありけるや 一説御厨子所ハ主(シュ)上の御膳(ゼン)をつかさどる所也され
ばよそ〳〵これら鵜飼なるべし
一みどりのうすやうにかきし紙 朝覲行幸(テウキンノギヤウカウ)には帛給をたまふ
にて上皇を拝し給ふゆゑに
一みづからの心ざしあらはれて 三界(カイ)
唯(ユイ)一心心外無(ゲム)別法(ベツボウ)のことはりなれば なき心をも心をあらはれてあるべ
きことわりなるや云々
一御張御帳 張(チヤウ)は戸帳の如し
の腸(ハラワタ)にくるまや
一家の檜佐 中宮の大夫などいふ

ゟ影也。院の御上をも中宮をもかけて宮仕人(ミヤツカヘヒト)成べし

一 みなもとのげんぢも　源の字をあげんとの給ふ。海こと氏聞えてあるさ
とや。されば、ちぎりかはさんとげじこいひ心也

一 みづからの氏長紫ハ　水鳥(ミツとり)とハ苦(アラバ)ねさしやんなる也。色もかうしめとハ、
源の心ハうへるゝぬとの心也。萩(ハギ)の下こそ心しきこともあれとは、紫の
上の萩をたとへていへり。長紫山若狭(ハワカサ)ノ国にあり也。是ハ比叡山を云也

一 馬寮左右のむまづかさ　六衛府の官人
を衛府。左右近衛府。左右兵衛府也。是をも左右馬づかさ　六衛
府とハいふ也。以上六人成べし。御門(ミカト)よりも六条院へまいれる馬也。芸術(センジュツ)
河海抄にも馬ニ要略して

一 みやび　風流(フウリウ)あるうちをいふ

一 みさうつ施入(セヨウ)し給　琴(キン)ものゝ音をも奇進(キシン)也

一みやまがねぐら　崇ノ上皇深山ニて御ごん源氏をうけて有り
とふ女三ノ宮をバ参らせまゐらせし河　異鳥　鵜或白鳥の異名也白鳥
も梟(フクロ)の一名也　　一みやきのうつは　六条ノ院の遊(カキ)
の目のうつをいへるか飛ニ名京ニ又禁中をもいへる哥にて
一流(若下)れゆくみづはいづくにかはたらく　神楽(ミカグラ)系もされを楽の名人也云こ
みぶ　壬生　同云れ封　封(フウ)れ戸(ト)ノをいへるハいかさかれすまや　二部戸ハ
民戸也　千(セン)戸ノ百戸ノと云ハ民戸を云せてこころふられを
封(フ)ともいふ也云こ　　一みちのとに嫁ぬれバ　生前死後(シヤウゼンシゴ)
ノ心のあるる也　此世れ人まていたるき心也
一みもきのこゝち　恐　おそろしくすゞろなる心也
一みこゝちあしくなる也　いくまで一段ごの紀されし也

一みづからくびやり　まくらはふらで心ぢらといふ心からくびやうし。脚

気のうすめくし

一みくさかたあけゆめ　白楽天

江州に云京へ左遷されてありけ。遊女のうたしが是ハ昔ハ都人なり

が商人の妻と成て客まつ。琴をよるまに人也。楽天是を聞て。

左遷の耳をあらためる心と云心ぞ。今夜聞君琵琶語如聴仙楽

耳暫明といへり。さやうの心なりけりや。一河海 花島見て

一みらせうくしほろけて　花葉の方ハ日本の方といへり。蜜を

さしほうげそてハ。蜜ハ虫の類なれバ。蜂の音とのまへ心也。それと

わろくらするや

一みよりふもちて　夕霧かれそまで。

まりふぢかなげくと也

一みもい　見分せや

一みそと世まとときとかまれ。代表一盃見源氏女千歳。末権大納廿

二季ハ三時なれ見所多やうにおりしまして此のとや
一みのり　みぞうきやう　季の御読経とて四季に仁王経を中宮にてか
ありしや
一みぞうれいなし　本妻の服
あるさいも三ヶ月あべし。然に私の志而法度の外さゝしゝるを
一斉宮人は　日陰のかつらによそて糸を結て付ある。是明は節会の
惣君日月此光もくれ夜ぶふとあるぶこを　もとせかへり
一三とせぞくりにあらぬ　此詞につきて。数ある呼節は三年
とこめかへり文葉の官位に付。数ある呼数さ此遊や　愚案此詞
八葉の八宮へ来りかひてより大君に心をつくしかふまでのよるを。
草子の此におかしきやうにもまめやかなるにもこゝろをつくす
まうかゝつゞくこゝを猶ぞくりにあらぬとさしよりまでせかやうにまどふれば

一 萬の年数官位もこれにて遠ざかる人の心まちぶべし

一 みくるまあしこそ 中ごろよりさがさいくゆきつれ足の労ゆくべきさまや

一 みやうれいと 行香机四角に

一 結密絲机とるもぬ多れ象紙さしてさぐりまや

一 みへがさねの うらおもてそてゆくへへいくら

一 みえしうぶ 行く人心をさくらあるべし

一 みそなきもあきれ 父母のごとく心を合せあり法度あれば深く

一 三ぜうぞく 三條四條や

さらは綱くりさまや

一 牛車のりし 本式の嫁娶の礼まや

一 三重かさね 女の裳装は裳唐衣ゆ細長は貴女装て物乱

故におる覧をそゆかや三重がさねの唐衣は中倍ありをいふまや

腰ハ小腰引腰也。衣ハ或白、或鉢摺、或羽紫濃なとに具也

一 哥 あづまや　みし人の　なで物ハ人形也。無骨人形こそ祭祀の具也。大恵の
忘しき紙衣こそとや。其の心ハ人形とぞわらはこぬへり

一 哥 みそぎ河せざればなん　なで物をとどめて、切ぬさある物あれば
いかで浮舟をうしろこその哥あるべし

一 御車なども例あれて　親王車ハ其様に愛御参内の時も毛車ハ
てあるべし。今ハ網代也
をまけじ物をとや
あはうらぬふ心也
布、紅梅に積する名也
舟物をひとへもんとや

一 哥 家主の　八家のさいはひぞ心

一 うき舟 みちまでいとまなくぬれべく

一 まるまひ みつし来　御厨子ハ上古今物を調す

一 哥 みをあけじ　切紙を粧いかぬ

一 みやこ鳥ぞ旅人ハ帰つる人

ちりとや
とゑや諸弦(ショシヤ)の条ニ飯を入と云ニ上ツ詞(シヤウホウコトバニク)云ミあしづつふまされとや

一みあし　御饌(ミアルジ)也　飯(ハン)をあるじ

一みちなし　氷淡(ミツノアハ)や

一みゆき　御国忌(ミユキ)天子の崩御(ホウギヨ)の見

｜

一上(シヤウ)らめしられど　上臈しきや

一しきし女房のめのと　交夜(カウイ)ニはつしき人也のめのとハ源氏の
めのとゑや。旅ハ里(サト)ニするへきさ代。禁中へ里よりめしよせて使(ツカヒ)ニつかい
すべし心うべし

一しほされがち　泣事(ナクコト)を塩出(シホタレ)と云

一しげ川ふかき　しげ川なるり心ふかきとや

一十二にて元服　人生十二(ヒトハシニテ)を一周(シウ)と云此年冠礼(クワンレイ)する事。和漢(ワカン)ニ
例あり

一しげつぼ　桐壺(キリツボ)のうち也　十淑景(シゲイ)

舎(シャ)也・舎(シャ)ハ敵(テキ)の陣(ヂン)也

一しつらひ 何料理(レウリ) 持仙廚

一しんそ 信(シン)じてや と云也

一しんでん 寝殿(シンデン)也

一じねん 自然(シゼン)

一じち 実(ジツ)也

一しぞく 属・類也・数(カズ)をいふなり

一しれ物 愚(グ)人 ぐちなる心也

一或アマの家の娘が[illegible]たり

一し哥 此哥物語よこすぢしわかれ露(ツユ)とすみれぬと榊(サカキ)の巻ニ見えたり。

さいはひ人とてつかされしうたとえしうかゞ見える榊ノ斎院(サイヰン)の事也

一しのゝめ 夜あけかたを云也

一しろきうすもの 夜の装束也

一しうねき人 人のいふ事をきかぬをしうねきと云也

一しらまゆみ きそしめつらるゝ也

一しらく これくと云心也

一ひらひら袖　あしらひをくろ時よく付けて　くろ袖や
褶(ビラ)うちしきや　一しをん花　紫苑(シヲン)色のこゑよ
うすものゝ裳(モ)や　しをんいろは面は蘇芳(スハウ)裏(ウラ)は萌黄(モエギ)也
一しろいろの衣うつ　八月九日正長夜(ヤサニナガキヨ) 千声(センセイ)万声(バンセイ)無止時(ヤムトキナシ) 白衣は
衣のかたちや　一しろきおりものうすいろ　うす色は
紫や　色さおさのこゑよ　うすいろのうつさをくろや
一しのぶ草　彩(キ)よ生(オホ)ゐる草也　一下けいし　下家司(ゲケイシ)や家司
つかさどるは大臣家也　一しらくまぬれ　ひとくぬれなるも
一ほしこぬる　ちりあれしる心也　年よるまで抱きあれしるを云や
一はづまやこて　喉病(シハブキヤミ)や　ついさのすや
ワキし記
一しくろくりつる　あのしを切(キリ)て　あつしてさて心得や　あさこあひ

いふ時もいふや

一しめて　領じうる心也

一しぞふて　そらぞふて也

一しがく　試楽也。楽気なしや

一秋風楽　盤渉調也

一正下のかい　四位正下加階也

正四位下と云事也。ついには加階こそけるも。官をすゝむる事。禁ぬ時。又は

行幸なども時の例ありて

一しれこそ　源氏のとかむ

の給ぬ氏のあなどりいふ心也

一しまいつなぐりて　露今案、

之がハ語也。語ハ衣のすそを云也。写

書衣エ下がはしして語をくり給也

一しあまねの冬。人のとる夜のしまくり。義れ徴の日。勅使

云ハ源袋束を着と馬をくりて鈴。或和鈴と用。杏紫をつ

くるやし

一しちなども　女車を隣ふる

も斯なりけれども。これハ熊志のびの心にてけるも

一しをれさうしをらしうらうとむべし

一しほれたれしほし　鴛鴦瓦冷霜華重ともしとあるを白

しさうさへなる。然す所じよる

一しめればり　酒連日本記　かざ海にあひしらひ給ふまし

一しくかる人　年ふりてさらぬ人ぞや。又さもしからひべしと定本

まさへば紫振人也。赤れ紫あせうきあつもか。孫のめさがのおや

一しぬらにあらけけさ　古早也。淡付也

一しづみてあらへても河　光源氏大將在納言れひしを承ノ云ヘ。

此所る隠居をしる也。古来赴謫ある也。人ハ配流の宮古まかりて

左遷すると今の源ハ謫る聖て。是れと擬れる隠居をうるまや。閑ト

亡母東他の謫を云へる也。北雷の変異ある例ある。又行平中納言も此後

うつれ。菅丞相西府左大臣の太宰府に遷され安楽寺の後

彼国へながされし例をもてよせける也。所陞之

一しやうじんそあけられぬところひかず河　聖廟宰府に下向し後ふ

弟子精進まて解夕法華経を令読誦とこそ云々

一二千里外故人心　三五夜中新月色　二千里外故人心

一しをるとのひがん人のひかあるやうる　史記曰　趙高欲為乱恐群

臣不聴乃先設験持鹿献於二世曰馬也二世咲曰丞相誤邪細

鹿為馬問左右々々或黙或言馬以阿順趙高或言鹿者高陰

中諸言鹿者以法　秦始皇　本作

後夢　漢宮万里月前腸　昭君の心を作り詩をかやつる也

一しきれのちの夢　胡角一声霜

一 昇門 しらざりしかば海源のおそ一ゆるまるなりせられを人形りなく

路也志ぬ事ときくはよむ也　一め十二日　事（エメ）れつぶ也

一しつまぎらをとふろしとゝそ　何替詮日不退（サハンシリカリ）有答

一十三日此月もるやうに　八月十三日也　面白く云也云々

一正三位（急合）　此物語今世ま不待（スツタハラ）　一十四め日毎日此日ところくべき

十四日普賢（フゲン）十め日阿弥陀（アミダ）晦日釈迦（シャカ）念仏常行三昧（ネンブツジャウギャウサンマイ）也　書よ月

よ二度ぎらのちぎらとある、此人めもろも見

一しまつるもまぎうしろりさん　袴（キ）着袴（ハカマ）のゝす云々

一しおき（あさぎ）此風　中臣祓（ナカトミバラヒ）の科戸（シナトノカゼ）風乾方（イヌヰヨリ）吹風也　天の八重雲も吹拂（フキハラフ）ぎとし

一しつらぼ二　神祇まで使うす志渡りぬ種のゝる（ホト）也　尾（ヲニ）ま　ぬ渡りん

の忠ぐるへや　　一四位よなしてんと（とゞめ）　親王の子ハ

、元服（ゲンブク）の後、従（ジユ）四位下よ叙（ジヨ）し、源氏君ハよれつての源氏の月例まあ

らず故に親主の子に准して四絃に叙しさんとせさせらるれども、
抒郷酌ありし也　　一四韻　四韻とは八句の詩也
一史記　百廿巻　馬遷作　　一式ノて　一弾八首也の式ノ々
も親王ありているらず夢てはされとある官也
一式ノれつきれ心られ詩と河　延長四年七月九日内記日去月廿
三日式ア省養省試判定其判及第省二人　以下略之　此詩試
勅詔をあふる延長應和康保ホの例也
一むろうゞのれるれ観世音寺　在筑前ノ國ニ沙弥満誓造筑前ノ國観
世音寺別当見万葉志ゃうゞハ京の若也
一しら寸らも　むちづしハ上つ句はぬともや詞より前まつゞけてうんへし。
こゝハ三穢山なげや　以こゝハぬるしるど吸べし水よりこえ

一しろきしろきなど　河　白細おりの草の細きをいふ。またつきたれバ。細きといふ何略しける也。腰元ハ縮也。腰をきざむ物也。畢　白きハ一家にかぎるやうにやめ　一助　合点

一志附かる　実法也　一しをき　ちそんせらんとらふ
といふまいかろし　一しうとく　言法也

一しじくことゐかう　ちぶことハちとかるや。こゐかうハこゐの入
そのやうまでくすぐる。文をつくろなるへし

一十三日まい河原へ　河原に出て解除するなり

一しつものいま　河　只ちぢめいきがひて束をとくのすもり

一しぞね　河　箇　一しげしをしられぬ　暦月在次

一かきづミを今まではしられぬとや。されぞなを紙のうまにすゐる

かとありけんとや。筆と硯と紙とにてこひわたる人を

一しんでんのはしちかくて此御所のさうしありて　元慶年七年十一

月十七日。陽成院(ヤウゼイヰン)の御寝殿(ガシンデンノ)西ノ放出(ハナチイデ)三間(ゲン)立螺鈿(ラテンノ)倚子(イス)一脚今

東紫宸の御殿は二条院にてありけるとかしるしとかや

一四十賀　四十ノ賀なればありつるゞのある御賀のを申大略のころをかきつけ(ムネ)

一しんでんのひさしにて　寝殿西のさいのひさし西ノ御廂の(ヒサシ)事

調度はかはるまはかれこれは今は物をわたされ(ルス)しける寝殿(シンデン)より

さるものは南の床にあるとかや　一ほれたる枝すこしをりて、

一資雅(スケマサ)は雁(カリ)の枝をしるしてけるとよしこそ是は萩の枝

をあまたつけたりとかや　略す　一しろくたる(ワラトド)萩をつかひけるさ

して東屋(アヅマヤ)遊(アソビ)荻(オキ)をあそばしける召人(メシ)もちて比人

のまひつゝまきすりまるとのへるを。野河海に人共とうけるを。不角

又人も鉢楽に舞。宴にてハ東遊也。此ぱの手のまハり。云鄕

舞は人舞も舞うすまゝ先ニ衡云ゝ　陪従にてハうまもしろき也。

に建子るべ興べし。同云河海に清暑堂ハ鉢楽試楽拍子

までをこらうる時。萩の枝を持ありそゝ。萩をうゝぎうするれ時はうき

海え。此拳ゝハ東遊の手まり舞ハ人萩をかざしうるとやけうまや。一動

此来一曲也云ゝ。同云東遊のひき鉢くうの時ひろをとこちすちれ一拍

合點云ゝ

一 しもうくゝ　うしろうるや

乱ゝうや万衆の手ふこぼれうるをまよ

一 しもねのまてしまるひろひろ

ひろうとよあるを

一 しいきひてあげくまるへとうき。

白楽天自歎詩云。氷十八翁方有後期思堪喜亦堪嗟持盃...

嬾無絶倍憤勿頑愚似汝爺　楽天五十八にして始て男子をまうけて、名を生遅と号して、子をよむりて詩をつくる。源四十八まて甚を生するためし也

一 しるもりの中のとへ　和琴第二の絃也。秘曲あれば落葉と謂

一 しつまうと　ようがはる模也

へおべきをとらむとや

一 七そうの法眼　讃師　浅路

呪耗三礼唄散花　堂達　此七僧役者也

一 しゆざれなりけるとくりて　垂衣の下にきるざれ衣なり

ハこぎぬとのへり。西宮抄云。上臈者垂長下衣下襲遊役不着之

一 しで此山　十王経ニ　死天山門集鬼神

一 しやくぢやう　佛名第三夜錫杖。御導師よもきて執。錫杖とよめり

一 しのあふこと　酒祝奉忘

一 しこさつなし　白氏文集十四。

郤陵白紙有三十束是君詩是書經年不展縁身病今日開看
生蠹魚　蠹は紙くらふむしと云也　紙魚。衣魚。白魚

一 哥あけまき
しなへなし　案内者へくりてまどふとき君のつくされしのみ也

一 常不軽をふんつゝと　法華經不軽品。我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道當得作佛　此廿四字の偈を唱て四衆に礼拜しありく　是ハ一切衆生の仏性を敬ゐるこゝろなるべし　大善思位に不軽菩薩とし

一 哥さゝふひ
しほるゝをつまれ　中宮兆にて

一 哥
しれてつや　しれてつハ級照日本記　是ハ万葉の哥をまなび引玉
のうれうとをこゝろを

一 哥や
しめゆひし　うちあへといひし
ことつまりぬといふて娘はうつゝしなや。ちめゆふハ執しうる心也

一しろきくぜう　あやきう　一上くらん　太政官(ダイセウグワン)　政官也、三官
と宛字(アテジ)にかきまちかや、こときげき官なとをくわて書也
一しらき　新羅(シラ)也　一しろき一丈　あや、おきやき
ころハちるをころをいふかや

源氏目案巻第七

恵　ゐは縫く

ひ

一ひとかた　氷(ヒタヒ)一方(カタ)といふ心也、ひとすぢなどいふをも同心也
一ひちて　袖をひとしぼるなり
一ひとつかてなん　物書(チヨクシヨ)の中にくらしけるなどをひとつにすると也心也
一ひとくだり　一領(ヒトクダリ)　長恨哥　春秋(シユンエ)一対(ツイ)とある也

一人のみどのくあし　楊貴妃(ヤウキヒ)をみて後玄宗(ゲンソウ)位をさり給し
ぞや　一ひさかた海にしう　源氏を生
雀院よりとも先うして皇嗣(ヨウグウ)に立給ふや
一ひろ宮　河亭子院(テイシヰン)第四ノ皇子敦慶(アツヨシ)親王号玉光宮(タマヒカルミヤ)好色無双(カウシヨクブサウ)ノ
美人(ビジン)也　一ひきつれの大臣　引への大臣とハ
烏帽子(エボウシ)親のことや葵(アオヒ)の上の父左大臣也加冠(カクハン)の人也
一ひさかのつきの我むすま蔵人所の鶴　左目此れ馬さハ左る寮(リヤウ)の我
馬也鷹(タカ)をすへてハ鷹飼(タカカヒ)る蔵人所の被官(ヒクハン)也　鷹飼ヲ云
けさく　ひかり源氏　名にしおふの巻の終の光(ヒカル)さいふをうけて書と
一ひさの人づけて　河由付(ユヘツケ)一色をうくしきす人もあるや
一ひとしく　それこれおなじほどのことを云也

一非参議　参議ハ天下の政をましはりつかさどる八省より
至りて大納言まで参議と云。非参議とは宰相にならぬ三
四位などのこと也　一ひさうなき　無比相　無貧相
尤・両説也　一ひゝげ　昔ハ尾ほあるさへ
とも今のやうな髪はそらず。尾さいひて、喝食などのやうに
まむすびやうまでつくほどや。さうなうちひげをさくるさかやき
ひそかなり　含出　何　顰蹙　人のあく時口に此をけニ出ス家
を云也。又年老ぬれバ口のすげむをも云也
一ひばらきみづうみ　此詞ハ鳥の羽をかいつくろう様ニ騒雀を引流く
一ひさあくべき物のかゝひゝ・机帳
ろひて・ひとろくる符也
一ひくやごとなき　並陽・何ゆへとも
帷也

あらこまる也

あまさ也

一ひとやまならぬ人ませそ

一びんなき　無便也

一ひぐらしと日暮れ　檜本とくさう檜也

一人となり　源・官位などすこなてと也

一ひらかなと　うそれは光あるさうしハ抱ある也

一ひあやうしと　今もひあやうじとよそいう。番の者の声也

一ひしく　引也　一人の哭　怨哭也

一ひぐ抱まて　僻者也　一ひらくちなき　也きまなあくさう心也

一ひやうみやうの家　紫の文後ハ或かくと云也

一一そう　一族也ひとつそん也紫の上ハ藤壺等一つの一族也

一人めしなき　しノ文字ハ体字也人めなき也

一 ひなび　夷(ひな)ぬるびとるや
さいや瞳(はし)とるやうや
一 ひとひつきとよあるゝれてび
一 人のこうどまでをほしやれ。
人のみどまでの白ハかゝ人さいすまつとていづちひるすハ
何ずるゝ青海波(せいがいは)ハ唐の楽(がく)なれバ左右のくのまけめをさへも
らをあてかゝ人のさよみとあへるされ心也
一 ひやうてうをしらべて　平調(ひやうでう)ハ箏(ことのぢ)柱をさげてうられるや。
呼るそのたゝ人ま一越調(いちこつでう)まてありけり箏(こと)は一越調をたる
かるから一越調。それから一越調とて二やうあるから一越調とは
ちらうをみもされ古人まをてうるや。それを一越性調といふ。又保曽(ほそ)
呂僕世利(ろくせり)ハ三。猶たる越調の楽や。平調(ひやうでう)の曲よおるず。先二(ふた)ツ平調よたるくて
調子どる弦ふ入あて後呂(ごりよ)れる急まちるしてあそろくをかさひ

れうちまでに彼志て誹諧と云ハまことに平調にて是も已に立観喜院
洞院大字ミく、又平調のこゝろあれどいくるや

一ひやうし　もうしとよむや、拍子もうしといふる事なるに
一人あまひ河人給ひ出車をバ公方より出されて天人まぬ
まゝ人給ひとよミかけくるや　人給ハ乗替や　枕草子もおなじ事なる
一人ひさうもかあまる志をも給ハぬるす　夕顔のゆふべハ終宴の

不足給ふや
ひとすじまと云同心
こころむつかしや
叩ふびひやすしるや
て袖ぬらしけるかや

一ひとうちに出立あふ　西海や
一ひとことや　火焼屋　神供し
一ひとつけ　河荻吉は印ともあるも
一ひぢかさ雨　笠もささずあへなし
一ひあわ　長和二年二月雷鳴

氷降大如梅界 あられさゞれまじりなや

一 人のみぞみと髪をちんじて傳説不古夏不亡勝計逃義は招てるけれど瑞雀ねるゝは彼てさや

一 びちれはらしまかて花琵琶ひきそわかく法師や前時の盲目のごとし、人のまくを時うつり世中もづまりぬれは 漢高祖戚夫人を寵をしまちて趙王如意をたてんとせし時呂太后とそれられて張良まちことをとれしゝ張良か云しまゝのりきて四皓をめして是をつれて高祖の前ゝ朝しぬれは高祖太子ゝろきて羽翼已なるとてれなて恵帝をうしまちて太子ゝそたゝ人られざりしるりを云也

一 ひらぞうは むをけちづるも ひとあられ中 中おしまや

一 ひらかてあるやし 深の色をを

ふくミせのかゆ根て、鉄ちりを書てらるべきも扨をさや

一ひと巻ま　殊結句の番肝要とおしへ給ふや

一ひぶちいきてくんの前まぼようれけるく　天満哥合左方洲濱紫

檀扎藕菅下扎紫綺地敷云る今案左方絵ハ紫檀の箱入

ゟて藕菅のまゝてつくれけるくまする文下づくゑまるべしまる敷

地ハ紫の色の綺や、打敷ハ扎をすべきる地敷也、されハ蒲萄染

くろれ綺や、藕足ハ扎の足、蕨くまの御や

一左右代ひきふりてま　哥合ま負持ぞそあるや、天満左

哥合ま藤花藤枝を洲濱まうすへてゞするし此節ま宜く、当の役

まそ仕せられるまや

一ひ乃比にぶらきひ　次生蛙児雛

己三歳両脚不立　旧夏紀

一　一日のりもまいさしのかうへしうち

陽成院の御母二条后也。業平中将ちぎりありし。伊勢物語にこゝろ
まゝそれとしるし侍る文などあまた有也

一ひうしろひそ　[illegible]女也

一ひとゝせ中宮の筆人に雪の山
枕草子云。志はすの十日あまりの程に。雪いみじうふりたるを。女
に成て遊しに涉涂有けれハ。さとびて。いかに雪の山つ
くらせ給ふ也。其とあけ里。御前の壷にも流てもとめて中宮に
ちかき女房の御前に作られける事。暗にハ[illegible]を初くるれ

一ひさうにもくらうらふ　非常侍従。礼儀にさやうにもなき事と云也

一ひうけの記　河以藤葛為年歳　古詩拾遺諸社のみなもひうけ等を
鬘にするや。昔の類也

一ひきもしめ　廁などさうやく
[illegible]ハにすましと云也

一其故ハ　照宣公めしつかれし

一ひのはかま　ひのはかま装束也

一たれつきにいとよしある官人
夜のとのゐ人給也
我官人ハ将監将曹府生を云也

一人まさりくわんとてハ　畢　紫式部を以てこめて過言を述也

一ひむろ　日本紀　氷室　氷を氷酒に漬して用とのへし氷水是也　氷室同じ
やまの氷也

一ひさいのうちに　ひとへ也

一ひたちおろすうた　一而嘲哢の虫也　波立出に計也　無心所著也

一ひらはり　平張

一ひとつかねてこそ　ひとりをとこあ

一ひたぶるに　家の哥も只独とつくる也

一ひはだいろの　檜皮色　柱の名に繝あり

一ひききりも　引切也

一ひこんき　緋金錦　金を織る

一尓錦也

一屏風四帖ようちれはよくきかへす。
うちれはよとハ勅筆の綵也。又哥をあそばさるゝと云説もあるか
やハ唐綾にてちかるゝ屏風也。うすくれんとはうすずみ也
一ひきかへしてくるゝそめさゝる様也
一人ゆくかう　忠臣不事二君。貞女不更二夫
一月一夜よそまむこと　往生礼讃云中夜中行中根人一白心戒
一處会蓮　善導
一ひかりくれ　光君嵯峨院に隠し
居し給二三年後つゐに崩御し給ふを云也。天子崩ハ崩御と
いふ也。此巻ニ幻巻ニしるし九年也。其の年幻巻にて又歳也。六歳
より十四まで九年也
一火をけちくる　法花経　佛此
猶燃薪盡火滅
一ひきちかくる　花撰に比き

一ひと氷魚　一ひとり　蜉蝣は朝に生じ
てりをまつ身無常の喩にひかれ何ごとにひをむしとおもふ
心ぞそとへひをむしの名にまよひきをとられてぞ有無すな
れ。只氷魚とりとりてハ何れ無なるべきなりや

一のろじろが　八丈為隠八丈ぢがけぢらくの心なるまじ

一ひがんのそそ　時所ハ昔日より何色彼岸ハよくさまることなし

一ひこぼし　彦星。白にせるを

一ひのをはあかさん香れぐふ　反魂香のゆゑや。李夫人かなそし液
漢武帝甘泉殿裏技皇蜀方士をして霊薬を合をしめて金炉
に焚しらぐ出の烟の中に夫人の姿みてしるや

一人いられ　袖の浦　出羽の名所や

一ひじりまち 聖人あらはれ世に出る様にあるを

一ひさしれ車 庇れ車 余色也

一ひらうげ 擯榔毛車

ふくべし

乳度

とりう

一ひもさし 垂衣の紐をさげして れ休息をすれども ちへの礼義をいふ

一人まよふを 波ふふれ節を白象へにもて まよふをとゞむる事をいふの縁也

一ひつじのあゆみ 屠所へ羊歩 度唐土羊牧亜食時まのぞまそて 屠所へ引行殺共 しるべにあゆむ 生を無常

まんぬとかくるを

一びやう風れくろは 昔八袋に入 流生無息誓

一人まうけるを

一ひさけくこ やまを戸ひらくそ

一ひさあけ まぶちや

一人のうむといふ 解義書曰

よんゑんくさを

一人のひむとひおすう　解義書日

夢見病人死必死

鬼よともあれと云詞也

思李夫人去漢王情

不知不遇傾城家　白氏文集

一人よまれをよみまれ。人ともあれ

一人のみくじるを　楊貴妃海唐帝ノ

一人がくせきた　人非木石皆有情

一人るさと　人数ハ水よるずす捨也

一ひを拘のみるよ　氷を六月暑をさくるねよ用ゆるや　河

一ひらくも　すくしるれハさやめずして立よるをと人不知也

一姫家のれぐ　女一家氏祇らひとちるを

一人まをくれ　人まら遂るる乞法花経　或被悪人逐とおるを

一人の心まどいさん　假令迷人耗若是真迷人遮るとよ

一ひもくる　面獲労まくるとるをうし芸田花あるどれ用又乞

一ひらつくしおやうずかそ　無本説。力をちぢんとり人の搞のか

こゝろをあぐるさまでくるしきを俗語(ゾクゴ)にいひ伝(ツタヘ)ふる事さ無式ニ

おもひみるをとちけんぢるしんの老尼(ラウニ)はさびしき心を吁(ガ)くる

一ひ日まするに 陵園妾(レウエンセウ)指擬(ハクジヤウ)終日(ヒメモス)風(カセ)蕭瑟(セウシツ)。手習(テナラヒ)の表此四季二の衍(スミ)なる。

陵園妾に似たるを　　一ひねらせ ひねりてねる也

一ひさかし(寄のうきさえし) 引干海草(ヒキボシカイサウ)也　　一ひさ川 飛瀑(ヒハウ)や

一ひさ波 人為(ヒトヽ)也　　一ひさささに 老一也、又ひとさきい

とやる所をとまる所まよぶべし　　一ひとけ(ちさ) しまき物のひさる也 誹諧

一ひさかご 桧破子(ヒハリコ) 誹諧　　一ひさうるも 緋段(ヒダウ)也 誹諧

一ひそく(まつび) 後成女流(ノセウニ)ひしほるの茶碗(チヤワン)の具足(グソク)也 誹諧

一屏風のおもて 表あるところをおもてと云、又うしろなりと云説あり 誹諧

一ひゝ 枚(ヒラ)や 誹諧　　一ひすいぢるそ 翡翠(スイ)や 誹諧

一ひやくぶんはいつけんにしかず　百歩の外、百歩は六十丈也、百歩は七えうい衰香

あるひは　法衣

も

一ようこうきとうるすれどころそ　玄宗皇帝、楊貴妃

を寵愛して天下をみだる。此外を例多し、其ら起驕る流れ

をもんべし

百官の座を殺ゆる。禁中を百殺と云也

一百殺ゑもとへ御さんことを

一ほうはしがは　義を催し催促也

一ようこうれ奇　詩のうや、詩ようとしれ云や、かゝ奇とも云也

一物しところしうす　此物と云字ちよろき字ぶる、よりて

ちあるし、一部の中よ有ぶるよ在て面白泊也、よろつもそ当れもの

こゝもじもれハ不可疏これ心得めくめさ

一抱のつましさほど　隙のもらくおりしまするまつて恥なるや

一抱いこゝ夢にても何にても姓あましさまする時、柳枝をけづりて、冠纓に抱忌とかきて付らく、右袖にも白紙にかきて付るやミれ蘆にも付らるや

一もちまじさい　もれまじこさや

一まらもれさらく　是ハ種姓ハ高き人なれど、世におとろへて友位いやしく、卑きもれ人をいふや

一まられねぎし　さる人の根本の種姓をいふや

一文章生　儒者の弟子時の官や

一まや　本座や、おまやあざまにいへり

一ものけ持りり、抱らけ持りるや

一抱げるさすなる　信心あるさとや

一あれくるゝかうてくろ猫也
さいさいはまくと云詞也
あればや

一抛のこしめは 紫の上いろやつの

一抛よまおかうすれい まそうり泳海

一まろとまにちらし 大内山ハ行

和ちよあまどりへど 竟ハ禁中ゐるをいふ

一まれぐらちかうして おさるれ人のくいくといふを抛流ごと云也

一まぎさ 裳着ハ袴着也

一まくこよふゝく 異本よまうふ

るすとある同心丸 蝸蝓行良 まくこよふハく 醉良也 此心まて無二子細一也

一抛ちるけるゝ小紫をお行ざきまて 大非家ハ紫をかうて垣ヨす

也 不浄を不遂お也

一まろこしまとワれ門まるゝ世

ますぐれ 漢家本朝其例多 野相公在納言菅家西宮左丁府

下接群賢走古華 赴配所之人 岙奇勝計 河 白氏文集序ニ

一 もんくとは 拙筆を綴るをいふなるべし

一 文武とは 漢才学未比叡識源氏信言之記

奇拾とせ

一 もろこしの歌は そ(れ) 字中れぬちぎり いろはをもつて只読中

のき傍ちら

一 もろこしにあらそはれても

秦始皇は楚荘襄王の子として即位実は臣下に通じて呂不韋之ニ

一 もろこしには春の詩のかしこさに 晋石季倫君金谷春花満

林朝作五十里錦障逢春不遊亦懶是愚人 承天

一 もろそのいえ 太和抛筆云 桃園安夕家うをおそれても

月毎日うし詠むことまで 文指遺集に桃園に住けるか

読む詞もまた是に比すべし 一 もんようとありて 文人の擬生

文代学文する人を玉ぐすうちをいふと所謂也 擬文章生と

云心也。文人として詩の試あるよしや。左様の次第をへてと云心なり。

一天子の御前にても試る　一文人もあまた　第一段　文人ハ儒者也

その学生八今月及第すべき人を云。といふ心なる也　一もじやうしちど　文字指石也

哥義のうへハ　一ますらけたる田の関　菊多関（クギダノセキ）在奥州ニ　少将うたひし心も。夕霧

の女の親よろこびやうしとさうあるまでうたひしと。夕霧の関のある

こゝをみかへしを女君の浅き名をとゝしけるを恨て文よるつや

夕霧又かくまで東まで下る事のある。行わかるゝにまかし給也

一まろこそハなれおぼえぬかな　嵯峨天皇の御代に弘仁八年に男女の装

服よ唐の法を用るといへり。其心を哀にいへり。河海同之

一もえまさりけ　萌木の陰也　一まろうへ落葉を　哥落下　まろうへ

さハ葵を桂の枝にかけるといへり。落葉ハまろうへハ落葉也

落胤腹（ハラ）や。名はむつましきらしとは。女二女三凡（ボン）也抜らる心や

一 目連（もくれん）が仏となりき　花　目連（モクレン）始て六通（ロクツウ）を得ると。仏となりきと

いへり又仏に親近（シンキン）する心もありや。其母の餓鬼（ガキ）道に落けるを救（スクヒ）

給ひし事。盂蘭（ウラ）盆経（ボンギヤウ）に詳（クハシ）也云々

一 むらさき　本津香（モトツカ）や　何はやさしき名也

一 うき舟おりえて　打入て繕（スク）や　　一 まつら人　本人（ホンニン）也　何は住宅也本人。

慕をさしてのなかや　　一 捌人いつるを　其へ悠揚（ユウヤウ）なんすれ。

捌て捌人あるらぢハ　詞多し。捌あるでのちにも其心あるべし

一 もいふが悔　流人に分ぬれ　乱ぬる旨そへて　眠（ブン）の前ある

まなまや。されば　其のと　関心（ヨウジン）あるべきなき

せ

一 宣命よむかん 補任のときに帝の仰を文にかきてよミあぐるのぶ
法なりとも いへば宣命よむべし

一 せうりやうこ 小うれ良也 又葉内

一 せうと 兄をせうとゝ云也

一 せちりよくしぬふ せちもし折角の心也

一 せつぶんもさちくてける 立春の日なれバ冬の果の心也

一 青海波 輪臺ハ青海波の序也 いづれも舞なり 南宮譜ニ
云 此曲第和此時 大納言良峯安世朝臣第 勅令作此曲
條勅改成盤涉調 以詠小野篁作詠

一 せんきやうじんのまへめれやうな 戚夫人ふたりめすこし 頼れ
かくさも人むつれなるぞ必あるべしされ心也 戚夫人ハ漢ノ高祖の
妾趙王如意の母也 恵帝の太子まてありしを立くんさせし

きざも。つかまさるまじくして。高祖は崩じたまひ。恵帝位をつぎ

あて後呂太后それむくひせんとして。戚夫人の眼をぬきて。人彘

となづけてかはやの中にをきしをそれしるなれとしや

史記曰。呂后本紀。太后遂斷戚夫人手足。去眼。煇耳。飲瘖薬。使

居厠中。命曰人彘

一 ぜじやう　軟障とかきてもぜちやうとよむや。并軟障とあるも幕のやうなる物なるべし

と絵かきて壁にかけて引や

一 せぞく紙　卑下の名也。或は下官なりとも紙のせなりと云や

一 ちくしかき　室ろぐかきや。俗に仰ぐかしと云に同し

一 せきくぐつとては　須磨の関をこえて明石へ入れむあれば。京は遠やうなるとや

一 せうそうするとて　逍遥や。あそびするをせうそうと云也

一摂政しいふハ　天皇の元服の後もいまだ幼主の時ハ摂政と是
を云復辟の表をたてまつりて君に政をかへし其後ハ摂政を
かへめて関白と称す冷泉院十一にて元服ましまして則ち位につ
き給ふ太子元服の後受禅の時摂政の例ハ清和貞観六年正
元服ある月八月九月忠仁公良房摂政乃詔を蒙る此例に准ず
る也。六十三の年齢なれど。忠仁公の例になぞらへらるゝ也
一せんしいむを先　宣旨の名ハ今ハ摂政家にあらず昔ハ院などにも
もいふ名なるべし御方の宣旨などゝ云名集の中にもみえたる
一せうけうたいくれしう　窮者也除目四品籍に内外の窮
者といふなりなどいへば大学の苦にて年久しく昇進せず
きめ心也　平家ハ卑下の詞也窮途急　日本記

一せちゑれ日うられざしき綏うけして　円のざしき綏うす

ハ白馬を引て左馬寮の松下借奉する儀式をうつしけるや

昔ハ良めしるを定むへるハ良房公の時の例をも移定むへるも

一かむ任くそく　仁徳天皇四年始置諸国史官明天皇慕和元

七月勅諸国守以云四年為限但陸奥出羽太宰是云官

国始自筑前等遡在千里以五ケ年可為任限云ゝ

一せうそこうろ　文ちぐけりきし為かろや

一せうさいくと　小齋

一せんうれりけざん　若上

あさんれちんのけざんやれ衍堂をバ薬焼也是ハぬちぬかれ御殿

べし　花鳥余情

一せちまうれくうろぬ　紫宸殿

山鵜のうちにとや

一せんぶいえんちぐ　庭の花檀也

又漸と云は東の方。山水なども絶たる所を云也

一せんぞれいこんハへいけの先祖也。清慎公を比して書り。民部卿

忠文といひし人。昔東夷をたいらぐる大将軍なりしが子細ありて

て清慎公の悪霊と成て子孫を退治しける。その先祖を比

してけるなり 河海抄

一せんゆうくといふ所 楽府名也

仙遊霞

一せきでんに 夕殿螢飛思悄然

長恨哥

一せんけう太子 河内本にハいせんく

いとなくて。或ハくい太子と云る。瞿夷太子善巧同名也 耶輸多羅と

同位瞿夷也 羅睺羅ノ母ナリ 羅睺羅ハ仏出家の後六年に生れしなり。

人とくひやうさる 昔耶輸多羅をば燈仏の世の時瞿夷女

と云なり。羅睺羅のわかりのいひけるなれば。別の因縁あ

みべきまや。ちくしば法花会まゐりて。二乗成仏のさとりもさのみにて。未来の記別をさづけあひし時。我為太子時羅睺為長子。我今成仏道受法為法子と。偈を説たまへりて。仏の御子とへさぶらはれけるを。ひが身にとひけりとさへいへるつや

一せちふ　四月の節ニ不成時とや

一せり川のたき　百さまぐさもあるべし

一せうもんに　松門暁到月徘徊　白氏文集をいへるは。月のめぐる詩也

す

一すけなう　河無二人意

心すゝやかれ心也

一すゞく　速く清くいさぎ心也

一すべて　都の字也

一すくえう　宿曜師。廿八宿九曜の行度をもて。人の運命

一なま勘ち名や・てんまんぐうせのこゝろ

一すりきゝゝづきゝ 修理職(シユリシキ)とも内匠寮(タクミツカサ)や作事(サクジ)すゝみなど ブ

いりや 番匠(バンジヤウ)の事とす 心得(ニ)や・河内なかにもすゝまとふみ

一すきごとも代 好色(カウシヨク)なるや 一すいがん ものいふこゝろ 家まで

いかれも 随分(スイブン)や 一すゝとく やくさくや

一すくれもの こゝろされよる心や 賺(スカス)

一すきもの 好色(カウシヨク)の人や 一ずゞきやうといふ ずらうと云

ろう富まなく・すゞやうは後世の守護(シユゴ)をいふ 國衙(コクガ)庄園(シヤウエン)のかう

それてゝなるものや・人の事とは他国(タコク)の事をいふ

一すゞつき すゞつき すゞつき おるなるべし

一すべるゝや 便(スベ・タヨリ)なるゝや 一すくせ すゞくせや 宿世(スクセ)

一すゞぐさ　すゞ虫すゞめかや

一すゞはなすゝめ。すゝきすゞや。さくらなすゝめハぶんそてちらさ
山とのすゞや。世ゞなわてそこなしハ山の遠近(ヱンキン)をわけ見や。金器(カナヲカ)
もし墨(スミ)一象まで。十女童へをこゝむ見や

一すゞろぶさて　ゞろなそて月。わくらをつくるまさ夜や。心のうち
れさる成べし　　一すのこゞろ船　すれさきんちゞや
ぶろ心なし。すれこめくさも以くさ

一すみうち　ミすみうちや　　一すゞひ結　そや　し結とい心や

一すゞがらは　縮(シユ)すゞや。ずくしさも　ずゞしさも見

一すくしく　さるれちすさをふや。すくう月なや

一すしちるひらく　すしハねぬさめや。事のくびゞ二音

なすなべこう紙衣あれどもひえとみけるを

一朱雀院(わうかう)の行幸　朱雀(スザク)院とハおほちねの御門のおこしまする所也。三条朱雀に四町に造(ツク)られるを。延喜の御宇(ギヨウ)にハ宇多(ウダ)の御門と朱雀院と申侍ろ。宇多の御門とハ。寛平法皇(クワンペイホウワウ)と申也。十月の行幸とハもみぢの賀の事成べし。春(ハル)秋(アキ)の行幸とてありし也とてら人きんの行幸といへり。此花宴の中将(ナカマサ)の手を紅葉賀(モミヂノガ)にハ出る也

一すゞむし　紅ハ末にちる花さく比(ケ)になる。自身(ジシン)にまつむしや

一すゞれ(タメ)　いまゞれ。又やすゞれの数(タクヒ)や

一ずいじんつらねて　随身(スイジン)御供の人やうしきまゐらう也

一すゞろに　そゞろ目。心得ずの心也

一すほう　修法(シユハウ)。祈禱(キタウ)や。御の字そへばこしほうし。みすほうともいふや

一ずの　きぬぞや

一すゞろかくろ　遠しろ袋(フクロ)や

一ずいぶい　竹をぞくそてすゞしき垣(カキ)や

一すれこ　ゑんをふや。又あうとれすれこともあるべし。あまよるべし

一すゞろひきる　すりくとめぐけのくゝさき海や

一朱雀院行幸　朱雀院のすゑに行幸。延喜(エンギ)十六年三月七日行幸朱雀院ニ宇多法皇五十ノ賀ト云ふ是をもみぢの賀と書なしるべし以奏ニよ

一院ピアへのゑ。則寛平(チクハンヘイ)法門よちあすゞろや。桐壺の帝在位(サイヰ)の中ハ。一院崩御(ホウギヨ)のすゑしざろハ寛平法皇ハ延喜ノ帝御門崩(ホウ)じ給てのち。くれさせ給ふぞや

一すさめぬ　不愛(スアモロ)

人ゞ(シゲ)を離(ハナレ)給ふれバや

一すちくにあふ給を　潔斎(ケツサイ)なく

一すゞろ河八十瀬　めれくしても。あれハぬれよぬや。すゞろ河ハ伊勢(イセ)の名所や

一すゞり此筆ちゐさくみせ河海に古硯を引くらへ其
僅者の筆ハ往来の事を留より始て神功皇后新羅をうちたまひ
給ひし時岩に幣をそへ明石の浦にて事をとゝのひて給ひけるにおやし
其風烈しく吹さらしてはまくらにおきけるに僅者硯
筆の新のふかきゆくにつゐに筆蔵におかれたるとや
一すいせんくしさう花人随人をあつふ手故べし随人も花人
さらにふるまべし
不行や
下に[illegible]や
一すゞりの寧相来議晩理至變入内
一すんちかれて逆流や盃の頃に
一すゞつきいしも其ハ体字也
一すゞ段さ[illegible]ためしまひひきくん小野篁の記にしるし此もち
の此月いとあつきに挽ぐらさけるにしるしてか月いおかすさまじ

人のいひければ 春を待冬のかぎりとふはぞ死月ころとて哀如けり

一 すゝはらひ年の暮なれど 薄雲(ウスクモノ)女院崩御(ホウギヨ)依諒闇(リヤウアンニ)被停止(テウジセ)也

一 おやけぢから やつばらしや　一 すけてう 中将の事也

一 すまし此姫君の 伯母北政所に中納言の姫三人ありし中に一ハ宮腹(ミヤハラ)そすれし宮(ミヤ)づかへさせんとて出し立(タテ)けるをまゝ母(ハ)紙腹(ハラ)のむすめ

めまゝしきをやすらしずそて思ひすをくらそ川(イロシアキ)

ね・此姫君(ヒメキミ)をげて伯母に世(シビスミ)付の故に(カルガユヘ)伯母姫君とはら兼今業伯母

の姫君のゝ世にまて見されしいさる北そむかぐ此今此地ぢしぱる紙

ぢゞき殿に待なりまも・主計(カゾヘノカミ)頭が加そらうさハ踐(ゼン)が志けるにあるへ

られ待るこそや　一 すいもん(ミコノミ) 湯(ユ)づけ籘(トウ)や

一 すゝしき(梅の花)綻ひそ 優(ミ)じ綻そとや

一 すゝしきかたきにむかし 千手深のかみかきには左の谷田也

一 菩薩院の御門あかしは華の渡 あかし御華は蓮のうてなそのまゝ

一 すゝれ山と右のまゝきゝゞるも 今案内典外典に義をとけるす

おほしといへど今此神道にいへるは善悪仏人の好修の奇妙を

とけるにすゝしきも無不可なし。但その心をさとるべし

先須弥と云は梵語にて蘇迷盧といふ妙高山と云。四宝を

もてつくれるにて妙と云。地に入事八万由旬地を出事八万由旬合

て十六万由旬の山なれはとて高と名つくるや。東西南北に四

州あり日月は山の半腹をめぐりて昼夜を照せるといへり。胎蔵界入

右の義は明右とのまれんとする夜の義といへり。あまりくく先をあ

きていそく須弥の山は山にをきてひと高き山也。右の義を

らうといふハ。およそバ右にかきたれバ。かのうしの人をいふ如くし。山の左右より
月旧をさしおくろハ月ハ中宮。日ハ東宮にたとふれバ。明石上の御事中し
家にまいりて孫に東宮を生奉るべき瑞也。さて山の下にくわしき。
光るなどとらぬといふハ明石の入道世俗のがれて栄華をむさぼらん
ものけれバ。その心緒をかへさずして。ひとつにおさめぬとハいへり。山をばひろ
き海にうかべをくとハ東宮つかさにの位につきまして。四海をしろしめさん
にあたるをあらはすべき心也。親房ハちかいの紀伊国のかたにて西をさして
は入。般若の舟に棹さして。生死の海を渡て西方極楽世界の岸に
いたるべきにたとふ。現当二世の願望を成就して。目出度瑞夢
也。善恵上人の夢に。須弥日月をとるといふハ。善光仏一つに
持ておさむべきすがたにて心を遠くなしといへど。各々願をとむ

上旨
出家の水鏡をうつすハ当世の利益(リヤク)ちくちあさめでたきへて也
そらつべきや。代略て

一 若下 佐よりみれれ乳ろくくちくし給ひん
まち保ノ年九月十九日の堂(ミダウ)開白 手時 右之尺 随身(ズイジン)宝家(シツカ)集ニ石清水
柿 佐吉給。東遊(アヅマアソビ)神楽(カグラ)ちきて。今案源氏君。相具(アヒグシ)盃(タハムル)ニ云ニ歌(ケイ)
佐吉可進(ジユンス)ニてこそ

一 哥 佐の江の松に秋ちかく 松の秋
かきる霧(シモ)の気色(ケイキ)のはじまりとろきハ。是ハ人言の前後(シミサ)とも知ぬしずぐ
錦のうけ給白ゆふりとや

一 槙木 すぎくちあき 八月くのちる
家心也

一 すゝやかに さらやかなと云心也

一 すゝしくて 若 すゝすずしくてこハ法にさらずれる心也

一 す(タモリ)給に 偏(シユ)確(キヤウ)に施(ホドコシ)なべきよしをしせれ。息所(ミヤスドコロ)のすれバくくこに給
しあひしや

一 幻 色こし人の 物弟子に。音(ムカシ)恋(コヒ)

一すりこぎとあり　八宗兼学のこと也

一すゞりとは　硯ハ文殊の眼といへり。此故に眼石と云。是によつて硯は物不書とあり。仙家の哥にみえたり

一すまひおとし　神亀三年始諸国へ進相撲人を七月十六七日召ね撲を召仰也。廿六日内取。廿七日廿八日召合。大月廿七日廿九日拔出小月廿八日也。諸国の健れ人を召集てけんずる也。猶ハ召合後によりてけんあるをぬき出と云

一ずさ　従者。下人也。又ハ出世の人あり也人めしつれ

一すだく　多集也

一すけ　出家也

69038
6AP78